



325  
235



始





24V59

325-235

# 青巖禪話

大內青巖著

大正  
5. 3. 20  
購求



欠





欠

述 述 述  
夢 裡 說  
古 渡 田 首





山鳥水長

萬々虫



『青巒禪話』正誤表

頁數	行數	正	誤
三〇	九	する	す
四五	九	諸法位	諸法位
五五	十	苦若甘瓜の下半漫 馬物を脱す	
九四	十二	ならぬ殊に御	ならぬ御
九七	三	信義だ	信だ
一〇四	五	禪儀の	禪の
一三〇	十	傳直指	傳指
一五三	十	不立文	不文
一七九	六	禪家の	禪の
一九三	一	度の盃	度盃
二一〇	二	し祖を喝	し佛祖を喝
二五〇	七	川も花も楓も	川も楓も
三三五	十二	所以て	所以つて



目次

第一 語篇

一、 參同契……………一

第二 默篇

二、 禪辨……………	五七
三、 禪教分別……………	六五
四、 禪宗の特色……………	一〇三
五、 曹洞宗の特色……………	一一三
六、 青年參禪の可否……………	一四九
七、 忘機……………	一五〇

目次

一



八、入位と信決定……………一七四

九、平常心是道……………一八二

一〇、生死……………一九六

一一、禪と念佛……………二〇九

一二、東坡居士……………二一三

一三、南山古梁禪師の幼時……………二二〇

一四、承陽大師の折伏……………二二六

一五、避暑法……………二三七

一六、好雪片々……………二四三

一七、扇子……………二五一

一八、松風……………二六一

一九、老梅樹……………二六八

二〇、狗子佛性……………二七六

二一、大蟲……………二八二

二二、祝聖……………二九二

### 第三 動篇

二三、投機の偈……………三〇一

二四、興禪護國論……………三〇二

二五、賢忠寺の額……………三〇三

二六、青松寺の額……………三〇四

二七、祖堂列位……………三〇六

二八、梅嶺和尚燈を消して眠る……………三〇九

二九、山鹿素行の禪學觀……………三一〇



目次	四
三〇、寶慶記……………	三二二
三一、葬儀に就いて僧俗の別……………	三二四
三二、打坐と看話……………	三二五
三三、信長と快川……………	三二六
三四、佛舍利と米粒……………	三二七
三五、無言の應對……………	三二八
三六、兀庵傲語……………	三二九
三七、百尺竿頭更進一步……………	三三〇
三八、坐禪の異名……………	三三一
三九、大顛と潮州……………	三三二
四〇、傳燈院……………	三三三
四一、孔子より幾世なりや……………	三三五

目次	五
四二、木庵の家風……………	三二六
四三、曹源無學……………	三二七
四四、鄭任鑰……………	三二八
四五、讀經の弊……………	三二八
四六、問答の弊……………	三三一
四七、別回向の弊……………	三三四
四八、元亨釋書……………	三三六
四九、人類同等……………	三三七
五〇、寒月照梅花……………	三三七
五一、嶽山……………	三三九
五二、江湖……………	三四〇
五三、江湖會……………	三四一



五四、斷臂……………	三四一
五五、珍牛和尚……………	三四三
五六、投子錄……………	三四四
五七、七歲女流……………	三四五
五八、後鳥羽院第三子……………	三四六
五九、茶道七則……………	三四七
六〇、即非是名……………	三四八
六一、蓮座……………	三四八
六二、大權修理菩薩……………	三五〇

第四 靜篇

六三、結制安居……………	三五一
--------------	-----

第一 語篇



325=237



一、參同契

高尙幽玄にして複雑綿密なる禪宗の宗乘を具體的に系統を立て、而も單純平易に説明せられたる者は石頭大師の參同契に過ぎたるは無  
 い參同契は僅に五言四十四句の古詩一首でしか無いか、若し世間の  
 風景や情態を詠じたもので有たならば、唐宋ころの詩人の作の中には  
 幾らも有るので、格別めづらしくも無い韻文で有るけれども、此の參同  
 契と名けられた詩は世の謂ゆる禪宗の學問の基礎と成たもので殊に  
 曹洞宗に於ては般若心經や觀音經と同様に毎朝佛前に讀誦して居る  
 全文二百二十字しか無いに依て、どんな小僧でも諳記して居る小僧で  
 も諳記はして居るが、老僧にも意味は解しにくい、意味は解せても實地  
 に其通り參究して證し得られんては何にも成らん、然し其實參實證を

參同契

一



するに就ても意味が分らんやうては致し方が無いに依て、其詞の分らんところだけ通辯すれば、私の役目は済むやうなもの、毎度申す如く凡そ禪家の書は皆參究すべきもので講釋すべきもので無い、尤も此れは禪書に限つたことでも無く、都て佛敎の經律論は實修實證の筈第てしか無いから、丁度藥劑の調合の仕方や其分量または其効能を書いたやうなもの、幾ら藥法を覺えても分量に委しくても、實地に服藥せんとは何の効能も無い、遺敎經にも我は良醫の病を知て藥を説くが如し服すると服せざるとは醫の咎に非ずと釋迦如來が今はの際の御遺言である、ソコの所を最初から能く心得て置いて貰はなくては、切角の講義が却て佛祖に對して申しわけの無い罪過に陥いる、互ひに深く恐れ深く慎まねば成らんことである、

サテ禪宗と申す宗旨は誠に妙な宗風で、唐宋の文學隆盛なころに勃興

した故であるかは知らんが、達磨大師最初傳法の時から韻語すなはち詩を以て唱へ始められた、尤も是れも禪宗に限らず支那以來に限らず、天竺てハヤ伽陀と云ふものが有て即ち支那の詩または我國の歌のやうなもの、教義を述べるのが普通の規則であつたと云ふこと、有るし、支那に翻譯されたときにも或は五言或は四言で偈頌と云ふものがあるけれども、韻字を踏んで詩のかたちを作つたのは、梁のころに傳大士の「心王銘」などといふのが古いところ、其れに次て達磨大師の傳法の偈で有らう、其偈は五言四句で八庚の韻が踏んである、即ち吾本來、此土傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成と云ふのである、此一首の詩に就ても達磨大師が不立文字と言はれたのが如何なる意味であらうと云ふ疑ひが起らねば成らぬ、無學文盲な禪宗の和尚等が不立文字と云ふことを不用文字と云ふことのやうに思ふて居るのは、天壤の違ひ



てある、達磨大師が少林山で九年面壁して居られたと云ふのを長い年月の間、ボンヤリとして何もせず居られたと思ふやうなもの、知つたことでは無い、梁の武帝に逢はれたころにはタシカニ支那語にも通じて居られて通辯いらすに直に問答されたので有らうと思はれる、其後は支那の文學にも通ぜられて箇様な韻語をも綴られたことと有らう、サテ其達磨大師の法を嗣がれた二祖の慧可大師には、文字として今日見るべきものは傳はつて居らんやうであるが、三祖僧璨大師は四言長篇の韻文で、信心銘を作られた、此れが先づ禪理を文字に顯はしたものの、尤も古く尤も纏まつたものである、此れを以て禪理の標準として往けば、今日の洞濟各派が妙なことを言ひ合つて議論して居るやうなことも無いはずである、四祖五祖にはドンな文字があるやら知らんが、其五祖が六祖に嗣法するとき、偈頌を慕られたのを見れば、随分文學が

行はれたものと見える、此時に神秀上座と盧行者の同韻で作つた五言四句の詩が一首つゝある、サテ其六祖の弟子に永嘉の玄覺大師と云ふのが、證道歌を七言長篇で作られた、此れが中々面白い、實は今度も其證道歌を講釋してほしいと云ふことと有たが、餘處で當節それを講じて居る人があると云ふことと有るから、私は、參同契にしやうと申したことと有つた、ソコで此參同契の作者は彼の六祖に正統の弟子が二人あつて、一人は南嶽の懷讓と云ひ、一人は青原の行思と云ふたが、其南嶽の弟子が馬祖道一、馬祖の弟子が百丈懷海、百丈の弟子が黃蘗希運、黃蘗の弟子が臨濟義玄と相續して之れが謂ゆる臨濟宗の方の系圖となつた、又青原行思の方は青原の弟子が石頭の希遷、石頭の弟子が藥山の惟儼、藥山の弟子が雲巖の曇成、雲巖の弟子が洞山の良价で、この洞山の洞の字が曹洞宗の洞の字である、其洞山の四世の祖にあたり、達磨八代の孫



である石頭希遷禪師が此參同契と云ふ五言長篇の古詩を作られたのである。箇様なわけて禪宗は達磨大師以來苟くも言詮あれば韻語で言ふと云ふ風習が相續して來つたから、其後にも洞山の寶鏡三昧と云ふ四言の古詩があり、又五位の頌と云ふ七言の詩もあり、雪竇や宏智の頌古も出來ると云ふことに成て、今日でも禪宗ではチヨット佛祖を供養するに香を焼くにも香語と稱して直に七言絶句の一首も唱へる、死人の引導を一つするにも忽ち韻語で其趣意を陳べると云ふ風習に成て、今では風習が轉じて儀式と成たやうな景況である、コンな話はドウても好いやうなもの、心得の悪い人は禪宗とさへ言ば無學文盲を主義として黙々として坐禪して居るか、左もなければ公案の工夫をするか云て、人間普通の妄想の外に更に一種異様な妄想を考へ出して、其れを見性とか悟道とか心得て居るのも多い世の中であるから、序ながら

申して置くことである、サテ此參同契は全文僅に二百二十字、禪宗殊に曹洞宗に於ては小僧でも且夕誦讀して居るのである、先づ其全文を讀んで見やう、

竺土大仙心	東西密相附	人根有利鈍	道無南北祖	靈源明皎潔
支派暗流注	執事元是迷	契理亦非悟	門々一切境	回互不回互
回而更相涉	不爾依位住	色本殊質象	聲元異樂苦	暗合上中言
明分清濁句	四大性自復	如子得其母	火熱風動搖	水濕地堅固
眼色耳音聲	鼻香舌鹹酢	然於一々法	依根葉分布	本末須飯宗
尊卑用其語	當明中有暗	勿以暗相遇	當暗中自明	勿以明相觀
明暗各相對	比如前後步	萬物自有功	當言用與處	事存函蓋合
理應箭鋒拄	承言須會宗	勿自立規矩	觸目不會道	運足焉知路
進步非近遠	迷隔山河固	謹白參玄人	光陰莫虛度	



この作者石頭希遷師の傳は傳燈錄の第三十卷に在るが、唐の則天皇后のころの人で天寶年間に衡山の南寺と云ふ所へ往て見られたところが其境内に大きな石が一つ有て其上が平坦で臺のやうに成て居るのを見附けられて、其上に草庵を結んで居られた、ソコで世間の人が石頭和尚石頭和尚と呼びなしたとある、遷化の後に唐の天子が勅して無際大師と云ふ諡號を贈られた、委く知たい人は本傳を見るが宜しい、此參同契には古來いろくの注釋がある、支那人では明の永覺元賢禪師の洞上古轍我國では享保ごろの人で天桂傳尊禪師の報恩編その後にも面山瑞方禪師の吹唱指月慧印禪師の不能語千丈巖禪師の杓木篇連山交易禪師にも何とか云ふものが有たと思ふ、其外に幾らも有らうが私は私の考案だけで古人の諸説をも參考するけれども、專ばらドレに依ると云ふことは致しません、此れは參同契に限らず何を講釋し

ても其考である私ばかりでは無い誰でもソウするが宜からうと思ふ人々の足て人々のあるきたい處を自由に運動するが好い、先づ初めに題號は

參同契

この題號は石頭大師が自から附けられたので有るやら、後人が附けたのやらタシカには分らんが此三字に就て色々なことを云ふ人が有る、姚秦の羅什法師の弟子の僧肇法師が書いた肇論と云ふのを石頭大師が見られたときに大に感服する所が有て參同契の三字を題として此偈頌を作られたと云ふ説もあり又列仙傳にある吳の魏伯陽と云ふ仙人が書いた參同契と云ふ書物がある、その題號を其まゝ借用せられて參同契と名けられたなど、云ふ説もある、トカク昔の人には成るだけ其據り所を古人に取らねば世に信ぜられぬと云ふ考があるからこのや



うな事を云ふのであるが何も石頭大師が僧肇に典據を取る必要も無ければ魏伯陽に借用するわけも有るまい石頭大師の參同契は石頭大師の參同契として何も不足は無いはづて有るサテ參と云ふは參互まは參差など、續く字で宇宙間の萬物萬事が森々羅々として在る有様を云ふので即ち一切諸法の相貌が參差として互ひに格別である謂ゆる萬法差別の景狀を形容した文字である同の字は全たく之對と反て同一とか同等とか續く字であるから一切諸法の本體本性が平等一如にして差別の無いところに名けたる詞であるサテ契の字が尤も肝要なので契合とか證契とか續く字で一切諸法の現相の差別ある其差別のまゝて平等の本體に契ふ有様すなはち萬法の妙用に名けられたのである參は萬法差別の現相同は萬法平等の本體契は差別即平等平等即差別の妙用この本體と現相と妙用との三大法に漏れるものは無

い即ち此三字が直に佛敎の總躰を標示せられた題號である此三字を「般若心經」には色即是空空即是色と説いてある色は一切有形の事物すなはち參の字の意味空は一切無形の體性すなはち同の字にあたり即是は俗に其まゝと云ふほどのこと便はち契の字である其他佛敎中の肝要な名義はドレを見ても此三字に漏れるものは無い次にイヨイヨ本文に入て

竺土大仙心東西密相附

この二句は先づ第一冒頭に佛祖の相承を擧げ示された竺土と云ふは天竺の國土と云ふまでのことと別に深い意味は無い大仙と云ふは釋迦牟尼如來のことと有るが普通に云ふときは佛の外に仙人と云ふものが有ると云ふのが天竺でも支那でも同じとて殊に支那では列仙傳など、云ふ本に並べてあるのが大抵老莊などの跡を慕ふ人たちが神



丹を服して長命不死の人になると云ふことを目的としたものと見える。天竺でも彼の娑羅門の一部に深山へ這入て何か人間に異なつたことを行ふて居るものが有るやうすて有る。然るに世間の人は佛の出世以前から其仙人を學ぶ慣習があるに依つて佛のことも仙人と云ふたことが有るものと見える。ソコで龍樹菩薩の書かれた般若燈論と云ふものなどには菩薩も聲聞も亦た仙と名く中に就く最尊なるが故に佛を大仙と名くとある。此他にも佛のことを大仙と云ふた例は幾らもある。トニカク竺土大仙心と云ふ五字はツツメて見れば佛心と云ふ二字になる。サ、此佛心が此宗門の目的物ぢや、竺土にばかり任せては置かれまい。釋迦老人にばかり任せては置かれまい。五大洲中はおろかのこゝと娑婆世界のみなならず十方世界に大仙心の無い處が有らうか。人間天上はあろかなこと禽獸虫魚に至るまでも大仙心を持たぬものが有ら

うかい、トは云ふものゝ東西密に相ひ附すとあつて、相附する所が無いれば佛心も御用には立たぬ。東と云ふたは支那を指したので西と云ふは天竺ぢや、初め天竺に釋迦牟尼佛が出世せられて、端坐六年の御修行により此佛心の大光明を發揮せられた。端坐六年の最後の十二月八日の曉天て有たと云ふことぢや、俗に明の明星と云ふ星がキラ／＼と東の天へ昇るのを御覽なされて豁然として悟を開かれた。此時盡十方世界と釋迦其人の身心と謂ゆる參同契せられたことである。其後五十年が間のお説法大小顯密權實清淨など、今の世に色々の名を附けられた種々の法を説かせられたが、皆只この佛心を相附することの出来るやうにと思し召しての外は無い。御一生涯に多くの弟子もあらせられたが、其中で摩訶迦葉と云ふお弟子に別段の御附屬があつて、我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬すと仰せら

參同契



れたと云ふことぢや、さて其摩訶迦葉にも多くの弟子も有たて有らうが本と釋尊に長い間お付き添ひ申して居られた阿難陀と云ふ人に其法を附屬せられ阿難陀は之を商那和修に商那和修は優婆塞多にと云ふ順序で十二代目が彼の名高い馬鳴十三代が迦那提婆十四代が龍樹それから二十一代が天親二十七代が般若多羅て其般若多羅の弟子が即ち菩提達磨これが天竺の二十八代で支那の初祖である先づ是れまてが西天の相承と申すので委しいことは皆其本傳すなはち傳燈錄に出で居るから見やうと思ふ人は御覽なさい手近い所ては日本の曹洞宗の太祖常濟大師の書かれた傳光錄と云ふ假名交りのものもある、サテ菩提達磨大師は支那の梁の普通年間(東渡せられて前にも申した通り)少林山に九年面壁遂に其佛心を二祖の慧可大師に相附し、三祖四祖五祖六祖と相附して來たが其相附する様子が謂ゆる以心傳心と云

ふので形のある土地や財産を相續するのは大に遠くに依て密に相附すと言はれた密は親密または綿密の義俗に云ふ秘密と云ふカクスことては無い隠さんても見えぬものには決して見えぬ幾ら隠しても見えるものは露堂々明歴々ぢや其れを心得違ひをして嗣法とか傳法とか云ふ儀式ばかりを密教の事相の傳授でもする氣に成て居る向も多いと云ふことぢや本を忘れて末の末に走るも程の有たものであると思はれる其儀式ばかりさへも満足に行はれぬ世の中に成ては、モハヤ何とも申しやうが無い、

人根有利鈍道無南北祖。

この二句は石頭大師當時世上にヤカマしき議論の有た南宗北宗の葛藤を一刀に裁斷せられた初め五祖大滿弘忍大師の門下は甚だ盛んなる事て有たと見えて幾百人と云ふ多くの弟子たちが皆致々として參



禪辨道に骨を折て居られたが其中で誰ぞ一人第六祖と爲て達磨大師傳來の衣鉢を相承するものが出来ねば成らん衣鉢と申すは釋迦如來が常に御飯を召あがられた鐵鉢と常に掛けて居られた袈裟との二品が迦葉以來二十八代傳家寶となつて相承し來つたのを達磨西來の時に支那へ持ち渡られて遂に二祖に附屬し三祖四祖と相承して今は現に五祖の手に在るのである之を相承するのが即ち釋迦如來嫡流の家督相續をした信號の神器となるので有るから五祖門下の數百人皆其相承を望んだことと有らうけれども此衣鉢は謂ゆる佛心相附の信號とするまでのもので有て見れば其佛心の大光明を果してタシカに發揮し得たもので無ければ受けることも成らず又授くべき者でも無いソコで五祖大師は一種の試験法を立てられて能く佛祖單傳の正法眼藏涅槃妙心を述べ盡して餘蘊なき偈頌即ち詩を作り得たるものが有

たならば其人に衣鉢を授けやうぞと言はれたものと見える然るに多くの弟子たちの中で最も上座に居られた神秀と云ふ人はいかにも大衆の上位を占めて居るだけに見識と云ひ文才と云ひ他に肩を並ぶる者の無い勢ひで直に五言四句の偈が出来た其偈は身是菩提樹心如明鏡臺時々勤拂拭勿使惹塵埃と云ふので有る其れを立派に書いて一同の見える處へ張り出したものと見える此偈の意味をザツと申して見れば吾々人間の肉體の身が此まゝ直に菩提の果を結ぶべき所の樹である云ふので即ち即身成佛と云ふほどの意味が第一句じや第二句に心は明なる鏡のチャンと鏡臺に据え附けられて居るが如きもので花が來れば花がうつり紅葉が來れば紅葉がうつる誠に潔白明瞭なるものである然るに其心の鏡に塵埃が積るに依て宇宙萬象の實體實相が明らかに見えぬのぢや其れ故に佛祖の道を修行する者は時々勤



めて其曇りを拂ひ拭ふて、憎い可愛い惜い欲いと云ふやうな八萬四千の塵埃を心の鏡に惹かせぬやうにせねば成らぬぞと云ふのが第三四の句の意味で、誠に御尤至極のお話と申さねば成らぬ、ソコで多くの弟子たちが寄り集りて其偈を讀て見て一同感服、モハヤ衣鉢は神秀上座のものと成たやうに評判いたしたと申すことぢや、然し五祖大師中々コンなこと許さるべきでは無い、然るにコゝに妙な人物が一人ある、嶺南と云ふ所の盧氏の人で、此ごろ大に感ずる所あり一人の母のあつたのを人に托して今道心の俄坊主となり、五祖大師の弟子に成りたいと云ふて來たが、俄坊主のことで見れば未だ大衆の交りも出來ぬので、行者と云ふものに成て居た、禪宗で行者と云ふのは世間の給仕と云ふのと同じこととて、卑賤の役目を勤るのである、斯人は盧氏であるから、盧行者、盧行者と呼ばれて、碓房で大衆の食ふ米を搗いて居た、然るに昨今

大評判のある神秀上座の偈頌の噂を聞いて、盧行者もチヨツと米搗の暇を偷んで往て見たところが、盧行者少しも感服しない、感服せんばかりで無く、大反對の考であるから、直に其韻を次いで別に一首の偈を作つた、菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、其意は神秀が身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如しと云ふたけれども、元來身だの心だのと名くべきものは無いと云ふので、一體に菩提樹と言ふ樹も無ければ、明鏡臺と云ふ臺も無い、其んなもの無いばかりでは無く、本來天地の間に一物も無いぞ、ドコへ塵埃を惹きやうが有る、迷も無ければ、悟も無い、衆生も無ければ、佛も無い、譬へて見やうならば、人間元來十全健康なものである、然るにイツの間にか病身に成て痛いと苦いと云ふ、ソコで止むを得ず、藥を吞む、ソレが即ち拂拭の手段である、然るに時々勤めて、藥を飲め、病を起さしむること勿れと云ふて居るうちは、決して眞



實の健康體に復したのでは無い、眞實十全健康の身なれば本來疾病なし、何の處にか薬餌を要せんやである、シテ見ると神秀は持薬の力て病を防いで居るので、尙ほ病人の仲間を離れぬ、盧行者は病もなければ薬もいらぬ健康の人であるから、全く比べものには成らん、ソコデ五祖門下の大衆が此偈を見て驚ろいたの驚ろかないのといふ話では無い、碓房て米を搗て居る今道心が神秀上座の傑作を辯駁した偈を作つたと云ふので有るから、寺中山内の大評判ぢや、五祖大師は最初盧行者が嶺南から來た時から目を附けて居られた様子で有たが、此評判を聞かれて偈の張出してある處へ往て御覽なさると、實に黑白判然モハヤ評論を要すべきでは無い、サテ此て又一言餘計なことを辯じて置きたいとがある、其れは外の事でも無いが、昔から六祖大師が無學文盲で眼に一丁字も無く此偈を作つたときにも神秀の偈が一字も讀めんので人に

讀て聞かせて貰ひ、自分の偈も人に書いてもらふたので有るなどと立派な本にまで書いてあるが、私は全く虚傳であらうと思ふ、人の詩を見て一字も讀めぬほどのものが、ドウして此偈が作られやうぞ、其見識が神秀に勝つて居るばかりでなく、辭句の調子も餘程氣韻が高い、况や次韻の法をチャンと踏んである所など決して眼に一丁字なき者の仕業では無い、唯その佛法に於る神秀は不立文字の眞趣に達せず、六祖は實に教外別傳の本際に達せられて有る所を比較して、古人が六祖に文字なしと言はれたのを、後に誤り傳へて眼に一丁字なしと云ふやうなことを世間の文字を知らぬものゝことのやうに言ひ誤つたので有らうと思ふ、此事は法寶壇經に委しく書てあることと有るけれども、彼の法寶壇經にも往々竄入があつて盡く信ずるわけには往かんと言はれた人もあるが、イカサマ其うて有らうと思はれる、其れはトモカクも五祖



大師は盧行者の偈を見られて心の中にタシカに印可せられたと見え  
 るが、いかにせん幾百人の上座と仰がれて居る神秀をさし措て碓房の  
 今道心に法を傳へ衣鉢を授くと云ふことは餘程注意することであ  
 るから、其時は知らぬ顔をして置て、其夜三更ひそかに五祖大師が盧行  
 者の居る碓房へ行れて更に行者を試験せられた問答があり、釋迦牟尼  
 如來嫡傳第三十三世の正法眼藏は衣鉢と共に盧行者に附與せられた、  
 其れが即ち曹溪の高祖諱は慧能後に大鑑禪師と諡號を賜はつた御方  
 である、然るに彼の神秀上座の方には多くの弟子たちが有て、彼の衣鉢  
 を取返さうと云ふ壯士の運動も有たが、其れも叶はず、遂に別に一家  
 を成して彼の時々勤めて拂拭せよと云ふ流義の佛法を弘通せられ  
 た、ソコで世に神秀の方を北宗と云ひ六祖の方を南宗と云ひ、又は其家  
 風の遠邊から南頓北漸などと云ふ評もあり、互ひに旗幟を立て、中

々議論が烈しかつたと見える、實に南宗は佛祖正傳の直指見性と云ふ  
 所からは六祖の言はるゝ通りに違ひないけれども、動もすれば破れ圓  
 頓ムチャ大乘と云ふことに陥入りたがるので、危ないことは誠に危な  
 い之に引かへ北宗の方は見識に鈍い所が有るか、はりに時々勤めて  
 拂拭せよと注意するのであるから、危険なところは少しもない、廻り道  
 をして往くのは往き着くのが遅いけれども、道中が安全だが、一足飛び  
 に往く方は愉快でもあり早くもあるか、はりに一足あやまつたら無  
 間地獄へ眞さかさまよ、此れは全く其人の機根に在ることと有るから  
 唐の則天皇后などは女性だけに神秀禪師を宮中に請待せられて國師  
 と崇められたと云ふことじや、トにカク此に一つ禪宗が二派に分れた  
 ものであるから、何やら佛法に二様の差別でも有るやうに思ふ者も有  
 たと見えて、石頭大師は其れを氣の毒に思はれて乃ち人根に利鈍あり



道に南北の祖なしと仰せられたのぢや、元來人間に伶俐なものも有れば愚鈍なものもある、伶俐なものは直に本來無一物と頓悟することも出来やうけれども天性愚鈍なものには一超直入することが出来ぬ、何も佛法の上に於て南頓の祖師だの北漸の祖師だのと云ふ差別の有るわけでは無いぞと、當時世上に喧ましい紛議を一言に裁判せられたのである、此二句の上から考へても此參同契などに述べられた宗乘と云ふものは、決して後世の人の頓悟とか見性とか云ふやうな一向に活潑愉快な言行をばかり尊とぶやうなわけのものでは無いと云ふことも知らねば成らん眞實の生死の一大事を心に掛けて本統に禪學をしやうと思ふ人は必らず此邊のところから歩々實地を踏んで往くやうに致したいのである、丸々あとも先も分らない奴にイキナリ趙州の無を工夫し來れとか、隻手の聲はドウぢやなどと云ふことばかりで、眼を瞋

らし拳を握り怒喝雷罵ほとんど狂せるが如くなるのを眞の獅子兒ぢやなどと譽めそやすのも餘り感服すべきではない、トは云ふものゝ、何ても坐禪さへすれば其れて好い線香と睨み競をして勝ちあふせるのが佛ぢや一寸線香の燃る長さ坐れば一寸の佛、二寸すわれは二寸の佛、何でも坐るが肝要ぢやとばかり云て、蛇を竹筒の中へ入れたやうに無理坐りに坐らせる何のために坐るのかと問へば、其んな理窟を言ふては往かん、トにカク坐れ、ト此れも誠に變なこと、一寸坐れば一寸の佛ならは九年面壁などは何萬何千丈の佛やらと冷かした古徳もある、大道元來凡聖ひとしく行く、馬も行けは牛も行く、月も通れば花も通る、大仙心とは何事ぞ、密附とはドウすることぞ、其れが何の菩提の爲めになるかと云ふことか、マ、其大本が定らんでは何を云ふても皆冗事よ、

靈源明皎潔支派暗流注執事元是迷契理亦非悟。



此四句は此參同契全鉢の大要を提起して示されたのである、千丈和尚が此靈源支派の二句を釋して、「源普ねく萬派を含み萬派もとより一源を離れず、源派一味にして而して明暗も亦た一時なり」と言はれたが、誠に能く言ひ盡してある、然し其れだけでは通俗には分るまい、已むを得ず亦た饒舌を要するぢや、靈源と云ふは奇妙不思議な本源と云ふこととて平生聞き慣れた詞で言へば眞如とか法性とか妙心とか本覺とか云ふことよ、一切萬物の本體本性同一平等にして差別の對待を絶したる所、これは元來明々歴々として塵埃などは少しも無い、六祖の謂ゆる本來無一物で初より塵埃を惹くべきものでは無い、其れだから明にして皎潔と言はれた、皎はシロク潔はキヨシ、如何にも美しく、有様ぢや、寒山の詩に「吾心秋月に似たり、碧潭澄て皎潔物の比倫に堪たる無し、我をして如何が説かしめんと云ふのがある、實に其皎潔の有様は比倫に

すべきものも無ければ何とも辯解の致し方も無い、誰やらの語にも、聖人の氣象を知らんと欲せば、自己胸中淨潔の時に於て之を觀るへしとある如く、人々各自に吾心の皎潔さを自から認得して謂ゆる冷煖自知するより外は無、サテ第二句に「支派暗に流注す」とある、支派は彼の皎潔たる本源から分れて出る所の有様、平生聞き慣れた名目では無明とか煩惱とか生死とか妄識とか、其外六道四生三千諸法森羅萬象など、色々なことを云ふ、此方は暗に流注すとあつて、明皎潔の反對ぢや、暗と云ふは明を失なふたので、物事の本統の姿が見えなく成た有様、流はナガレル注はソ、グて無常變遷とウツリカハル様の形容詞ぢや、物事が色々と遷り變るから千差萬別で、前の靈源の同一平等とは全く反對になる、ソコで其差別の物事に執着して同一平等の本源を忘れる者が天下滔々皆其れよ、古往今來其外に出でぬ、其れを第三句に事を執する元



是れ迷<sup>〇</sup>と言はれた世間の有様は皆この迷<sup>〇</sup>事と云ふは一切の萬事萬物を皆總括して云ふたのぢや世の中の人にはトカク執<sup>〇</sup>と云ふものを離れ得ぬ執はトルと云ふ字て手に物を捉らまいて離さないことぞ善と悪とか是非とか曲直とか甚だしきは君臣父子の間で權利だの義務だのと云ふことを争ふことに至る迷<sup>〇</sup>も煩惱とも名の附やうの無い次第で有る其れを超脱したつもりで虚無恬澹であるとか無爲の化であるとか云ふやうなことを高尚らしく言ふものも昔から頗ぶる多い其れ等に聖賢君子とか哲人傑士とか色々有難そうな名を付けて有るけれども矢張り執着の二字を免かるゝことは出来ない然らば暗に流注する支派の差別を離れて明に皎潔たる靈源の平等に契<sup>〇</sup>ふのが其れが眞理かと云ふに其れも同罪で理に契<sup>〇</sup>ふも亦た悟に非<sup>〇</sup>ずぢや悟と云ふたら又悟に附て廻るて有らうが是れは韻字の都合で使ふたまで

のことで迷も悟りも實は同罪よ迷に執着して居るのは鐵の鎖で縛られて居るやうなもので悟に取り附いて居るのは金の鎖に繋がれたやうなものぞ金と鐵とは其品に違ひは有ても繋縛されて自由の利かぬことは少しも違ひが無い地獄が熱國なら極樂は寒國よドチラも永住は御免蒙むりたいトは云ふものの途中に流浪する懶惰放逸は本より論の限りぢやサ何としたもので有らうぞ源派と云ひ明暗と云ひ事理と云ひ執契と云ひ迷悟と云ふ都べて兩々相對して見えるがドチラへ片寄ても成らずト云ふて中間に迂路つくとも成らぬと云ふのぢやソコが參同契の必要なところ參同契に限らぬ佛々祖々は唯この一大事因縁のために世に出現せられたと云ふことぢや人々各自に鼻の孔がある他人を雇ふて呼吸すべきで無い

門々一切境回互不回互回而更相涉不爾依位住



此四句は一切諸法謂ゆる宇宙萬象の上に於て回互と云ふことと不回互と云ふことの有ることを示されたので、前の二句に先づ其名目を標はして、後の二句で其譯を辨ぜられた、回互と云ふは文字の通りメグラヌと云ふ字とタガヒニと云ふ字で、物事が相互ひに其徳用を回らし合ふこと、早や分りに申せば萬事萬物が其れ、自分を持ち具へて居る本分の徳を、相互ひに融通すると云ふことである、門々一切の境と云ふは門は眼門耳門などと云ふ意味で、眼耳鼻舌身意の六つが色聲香味觸法の六つを引入れる門口である所から門々と言はれた、眼耳鼻舌身意が六識を生ず根原になると云ふ意味のときは六根と云ふけれども、畢竟文字が違ふだけのこと、門と云ふのも根と云ふのも同じとてある、一切の境と云ふはすべて宇宙間に有り、と有らゆる物事を惣稱したので之を約めて申せば、即ち色聲香味觸法の六つである、此六つが彼の皎

潔なる靈源を穢すとに成ると云ふ所から之を六塵と名けるのちや實に此六根と六塵との關係から一切萬法が顯はれる、吾々相互ひに眼があるから色が見える耳があるから聲が聞える、聞えれば好い聲だとか、壓な音だとか、擇り嫌ひをする、見えれば奇麗とか、穢汚とか、憎愛が生ずる鼻の香に於ける舌の味に於ける皆其通り、是れから八萬四千の塵勞も起り八萬四千の法門も立つ、ソレはトにカクに今この第一句は主觀の上から門々と云ひ、客觀の方から一切境と云て、宇宙の萬象を五字に約めたのである、サテ其宇宙の萬象に回互と不回互と云ふことが有る、相互ひに回融し合ふ邊と、相互ひに回融し合ふことの出來ぬ邊と兩様ある、則ち回互する邊では回して而して更に相渉る、回互の字は前に申した通りのこと、渉の字は交渉などと申して別々なものが双方から相談を致し合ふこと、今は先づ眼門と色境と相交渉し、耳門と聲境とが相回



融する鼻も舌も同じことて、凡そ相交渉するときには其間に同異の沙汰は容れられない者である例へば晴れ渡つたる大空に一輪の明月が皎々と照り輝いて居る、ウツカリして居れば月夜とも暗夜とも知らず、に明かすものも有らうが、ア、今宵の月は好い月ではある、また見んと思ひし時の秋だにも今宵の月に寝られやはする、と承陽大師が詠ませられたやうなアンバイ、又深草の元政上人が「なほ深く見てこそ已まめ山里のさびしさ飽かぬ秋の夜の月などと詠まれたやうなときには、月が我れやら我れが月やら差別の附くはずのものでは無い、亡友の成島柳北が「月や我れ我れや月かの分かぬまで心も空にすめる秋の夜」と詠んだのが、實に其通りのことて月と我と別々のものとは思はれぬ、トは云ふものゝ我が眼が空へ飛び出して往たわけても無く、空の月が我の眼の中へ飛び込んで來たわけても無い、月は月よ我は我よ、月と我

と混雜はせんけれども、月と我と差別は無い、此間に差別が有たら眞實に月を観ることは出來ぬ、コゝのアンバイさへ吞込めれば參同契の話はドウやらコウやら分らねば成らぬ、參同契と云へば又別物のやうに聞えるかも知れんが、佛法の大體この外は無からうと思ふ、サテ又不同互と云ふ邊からは萬物各自に其本位に住して寂然不動である、ソコを爾らざれば位に依て住すと云はれた、爾らざればと云ふは回互せんければと云ふほどのことよ、

色本殊質象、聲元異樂苦、暗合上中言、明分清濁句。

これから以下は萬象の或は回互し或は回互せざる様子を解き明かされるのである、前の三句は六塵の中から色と聲とを擧げて來て、其質象や苦樂に色を差別がある、と云ふことを示された、質と云ふは物質と續いて其物の品がらのこと、即ち木であるとか土であるとか又は堅いと



か柔らかいと云ふやうなこと、象はカタチであるから其の物の形が丸いとか三角だとか長いとか短かいとか云ふやうなこと、一體に佛教では凡そ形のあるものゝことを都べて色法と云ふ、其色法に三通りの差別が有て顯色と形色と無表色と云ふ無表色のことは、面倒だから御あづかりとして、其顯色と云ふは赤いと青いと云ふ世間普通に色と云ふのである、サテ其形色と云ふのが謂ゆる質象で、物がらの形の上から眼の相手に作るものゝことである、實に眼に映り来る質象は千萬無量で、細かに申せば世の中に一つも同じものは無い、吉野山かすみの奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけりなど、申して満山同一色さくらの外には何も無いなど、云ふけれども、一輪の花も同じ花は無い、一片の葉も同じ花片は無い、大海の水も一口に水と云へば水に違ひないけれども一滴一滴に皆別々よ、ソコを色本と質象を殊にすと言は

れた聲元と樂苦を異にすと云ふも同じこととて前の句は色の上から云ひ此句は聲の上から云ふたまでのこと、樂苦の二字は敢へて聲の上に限つたことでは無い、凡そ眼に見るものでも耳に聞くものでも乃至身に觸れ意に思ふ、一切の物事から起つて來る情態も亦た千差萬別であるけれども結局するところは苦と樂との二つに歸着する、世の中の人が何やらエラそうに國家とか社會とか文明とか野蠻とか、ヤレ權利だの義務だのと言ひ立てるのも、結局は苦みを免れて樂みを得たいと云ふより外は無い、唯その苦樂に段々と等級が有つて、貧窮人は食へる食へないと云ふところて苦樂の相場が立つ、少し進めば食ふ相談は通りぬけて洗濯の着替の一枚も欲しい、今年のお祭りには子供に新らしい裕を一つ着せたいと云ふやうな所で苦樂を説く、其れが段々進んで往くと段々苦みも高尙になり樂みも遠大になる、そこで佛は其萬苦の中の



最大苦源を抜いて其樂みの中の最大眞樂を我々衆生に得させやうと云ふので色々と心配せられたものぢや、然し今コゝては其れまでの話には無い、世の中の普通に云ふ苦樂て宜しい、實に我々の眼耳鼻舌身意に涉入し來る色聲香味觸法は苦の種てなければ樂の種、その樂も當座のこと其苦と云ふも直に遷り變るイヤハヤ無常轉變少しも當にはならぬ、行誠上人が春は花秋は紅葉と一歳も同じ色には見えぬ世の中と詠まれたことがある、實に千變萬化の世の中ぢや、サテ是の如く千變萬化の世の中では有るけれども、互互するときは暗に上中の言を合し互せざるときは明に清濁の句を分かつ、上中と云ふは上下と云ふも同じこと、此の參同契は五言古詩の體て悉く韻字を踏んだもので有るか、散文のやうに文字を勝手に使ふことが出来ぬに依て、折々妙な詞があるけれども結局文字に拘はつて居るには及ばぬ、上下でも内外でも

古今ても何でも宜しい暗に合すと云ひ明に分かつと云ふたのも清濁と云ふたのも、句言と云ふたのも、皆其文字に拘泥するには及ばん、ワザと色々の字を充てゝ見るが宜しい、そうすると能く意味も分ることになる、例へば内に大小の量を納れ外に長短の度を出だすと云ふても好ければ堅に凡聖の智を混じ横に人畜の心を分つと云ふても好し、又は坐しては迷悟の情を忘れ行ては山水の別を知ると云ふても好からう、トにカク回互と不回互の一に非ず二に非ざること、は大凡斯んなアンパイぢや、

四大性自復。如子得其母。火熱風動搖。水濕地堅固。眼耳鼻音聲。鼻香舌鹹酢。然於一々法。依根葉分布。

此八句は別して不回互すなはち萬物みな其位に依て住する有様を説かせられた文は字の通り誠に分り易い、中に就く前の四句は地水火風



の四大の不回互を説き、次の二句は六根の本分を擧げ、後の二句は都べてに掛る四大と云ふは其質で云へば地水火風また其性で云へば堅濕煖動である、凡そ世の中に有りとうらゆる物は皆この四つを離れることは出来ぬ、そこで一切に普ねき邊から大の字を以て名としてある、之に空大を加へれば五大となる、更に識大を加へれば六大と言ふ、大乘では六大又は七大と説くけれども小乗では四大だけを説くので、四大だけなれば名こそ違へ今の世間の科學の上でも之を細別するまでのこととて有らうと思ふ、凡そ都べての物に堅まる性質がある、其れを地大と名ける、地は河嶽を載せて重しとせずと云ふやうなわけて、凡そ堅い物の中に一番堅いと云ふ所から堅い性質の惣代に地を選擧したものである、偕また凡そ都べての物に皆多少の濕ほひを持って居る、其水大と名けたのも水は實に凡そ濕ほふもの、本家本元といふ姿であるから水

を濕性の惣代に立てた、凡そ都べての物に皆煖たかなと云ふ性質を持つて居る、其惣代に火を擧げて火大と名けた、凡そ都べての物に動く性質がある、然るに動く物の尤も甚だしいのは風であるから動く惣代は風大と云ふことに成た、實に萬物この四大性質を具へないものは無い、吾々の身體で申して見れば骨にせよ皮にせよ凡そ堅まつて居る部分は皆地大、血液にせよ津液にせよ凡そ濕ほふものは皆水大、身體に熱度が無くなつては生きて居られず、身體が動かなく成ては命が無い、偕また其地水火風が互ひに和合して居て、地大の中にも他の水火風が有り、水大の中にも地火風が有る、幾ら冷たい水でも幾分かの煖氣もあり、何程堅い石でも幾分かの濕ほひも有れば煖たかみもあるに違ひない、其れだから四大和合して萬物が成立て居る、然るに今は其本性の不回互の様子を言ふので有るから、四大の性自づから復すとある復の字は往復



の復の字で往たもの、歸ることであるから、其本性に返ること即ち  
 火は熱に復り、風は動搖に復り、水は濕に復り、地は堅固に復る、譬へば  
 子の其母を得るが如しとある、一旦迷子などに成て母の手元を離れて  
 居た子供が元の母の手元へ立戻りて來た時には別に紹介人を煩はす  
 べきでは無い、ア、能く歸つて來てくれた御母さん戀しかつたと云ふ  
 間には、一異の沙汰は無いやうなものを、次に眼は色、耳は音、鼻は香、舌  
 は鹹酢、この二句は六根六塵の中の四つだけを擧げて他の二つをば此  
 中に含ませたのである、眼には眼の本分があり、耳には耳の本分がある  
 幾ら眼と耳とが隣り同士でも、耳で色を見るわけにも往かず、眼で聲を  
 聞くことも成らぬ、鼻も舌も其通り各自に其本分が有て動かすことは  
 出來ぬ、萬物不回互の有様、明々歴々ぢや、然も一々の法に於て根に依て  
 葉分す、一々法と云ふは一切諸法皆其れに違ひないが、今こゝに擧げて

ある所だけでも四大六根いづれも皆各々其本躰から活用を顯はす有  
 様が例へば草木の根に依て葉の分布する如くであるぞと云ふのであ  
 る

本末須歸宗尊卑用其語

此二句は前に説明された不回互の義を結ばれた、今までは四大とか六  
 根とか形の上だけで言はれたのを更に確かに法の上に結歸せられた  
 のである、本末と云ふは前に根、葉と言はれたのを受けたので、ヤハリ同  
 じ意味の言葉宗と云ふは即ち大仙心のこと、設へ一切諸法に本末は有  
 ても根葉は有ても、都べて其儘に皆大仙心に結歸せねば成らぬ、と言へ  
 ば強て然うさせるやうにも聞ゆるかは知らんが、火は熱のまゝに佛心  
 である、風は動搖のまゝに佛心である、乃至鼻に至ては香臭のまゝ、舌に  
 在ては鹹酢のまゝに皆佛心で、別に安排布置を借るべきでは無い、尊卑



その語を用ゆと云ふは、本末ともに宗に歸したる上の活用である、尊卑と云ふは天子將軍でも穢多非人でもと云ふほどの詞語の字は韻字の都合で語と言ふたけれども、語黙動靜みな同じことよ、然し語とあるかは語でも宜しい、天子には天子の語があり百姓には百姓の語がある、乃至親に親の言葉があり子に子の言葉がある、夫婦も兄弟も師弟も朋友も皆それ／＼の物の言ひやう言語が無ければならぬ、鳥はカ／＼と鳴き雀はチュウ／＼と囀づる言語音聲ばかりでは無い、起居振舞皆其通り出家には出家の起居振舞があり在家には在家の起居振舞があるべきぢや、其處に間違さへ無ければ天下泰平で有から永嘉大師は行も亦た禪坐も亦た禪悟、默動靜躰安然と言はれてある、尊卑貴賤老弱男女山川草木人天鬼畜皆各々其本分の言語動作を用ゆるぢや、先づ不互の有様はコ／＼したもの、ソコで次には回互中に不回互あり、不回互中

に回互あることを明される。

當明中有暗、勿以暗相遇、當暗中有明、勿以明相觀。

明と暗とは對待の法で別々なものが向ひあふて居る大小と云ふも長短と云ふも是非曲直と云ふも深淺高低と云ふも凡聖迷悟と云ふも煩惱菩提と云ふも生死涅槃と云ふも皆同じことよ、遇の字も觀の字も韻字の都合でコウ云ふたまでのこと、何と云ふ字に取替へても宜しい、サテ明暗だの迷悟だのと云ふ對待の法は都べて獨立することの出来なものである、明と云ふは暗があればこそ明と云ふ名も附いたもの、明が無ければ暗と云ふ字も亦た無いはず、馬鹿は利口の飾り物と云ふ俚諺がある、誠に眞理に近い言ひぐさぢや、一體宇宙の眞理實相には明暗も無ければ迷悟も無い、其迷悟も無ければ明暗も無い、其儘に明暗迷悟の相貌歴然として、山は高く水は長いぞ、山は高く水は長い其儘に、明暗迷悟



の問ふべきは無い、然るに若其相貌にばかり取附て、明だの暗だのとウ  
ロツキ廻つては、決して大仙心を觀ることは出来ぬぞと云ふのである、  
明暗各相對比、如前後步、萬物自有功、當言用與處

前の意味を更に説明される、初めの二句は明暗對待の様子を譬を以て  
説き、後の二句は其機能を明された、此明暗の二字も前と同じことて、凡  
聖迷悟とも人畜草木とも萬事萬物に掛けて見るが宜しい、凡そ長いと  
か短いか苦いか楽しいとか云ふ向ひ合の物事は、譬へて見やうな  
らは前後の歩の如し、二本の足を互ひ違ひに運ばせて歩くやうなもの  
よ、先づ右の足を出したなら之に前歩と云ふ名を附けるて有らうが、直  
に左の足が出れば前歩はモハヤ後歩に成た、又右の足また左の足と誠  
に中善く喧嘩もせず理窟も言はず、相互ひに二本の足の本分を盡して  
行く此間に權利も無ければ義務も無い、唯其本分を盡すのみぢや眼に

在て物を見る耳に在て聲を聞く鼻に在て香を嗅ぎ舌に在て甘酸を味  
はふも皆其通り、眉毛は眼の上に横たはつて居ても敢て尊大と云ふわ  
けては無い、髯は鼻の下にムシヤクシヤとして居ても卑屈でも無けれ  
ば不平でも無い、萬物のづから功あり當に用と處とを言ふべし、水に  
は水の功能があり火には火の功がある、但その用と處とが大切ぢや用  
と云ふは作用とついでに謂ゆる其物事のハタラキ處は止處と申して  
其物事の居場處ぢや綿蠻たる黄鳥丘隅に止まる、其止まる所を知て而  
して後に止まる、人をして鳥に如かざらしむ可けんやと儒者の書にも  
言ふてある、止まるべき所に止まると云ふは不回互の義で、經には諸法  
位に住すと言ふてある、頭は必らず一つて必らず上に居り、足は必らず  
二本で必らず下に居る、其居場所が違ふたら大變ぢや、居場所の上と下  
と其物の一つと二本と正反對に隔つてはあるけれども、其用即ちハタ



ラキは回互宛轉決して別々の物ては無い、足の小指の爪先へ蚊が一つ  
 トマつても直に頭がソレ蚊が来たぞと號令する直に手が動き出して  
 之を逐ひ除ける、其親しさ陸ましさ誠に不思議なものである、彼の火と  
 水ほど中の悪いものは無いと人は思ふて居る、然るに其用と處とを得  
 さへすれば水火ほど中の好いものは無い、居場所はドコぞ火は必らず  
 釜の下に居るが好い、水は必らず釜の中に居るが好い、サ、火も水も居  
 場所はチャンと定まつた、ソコで火も水も各々其本分の作用を活動さ  
 せて湯が沸く飯が炊ける汁が煮える、萬物の靈長と言はれる人間も  
 蔭で命を繋ぐことが出来る、然し是れは回互する邊で申したまてのこ  
 と若し不回互の様を言はゞ、鶴の口端は長く鴨の脛は短い、鴉は黒く鶯  
 は白い、長短黑白皆そのまゝに天真爛漫ぢや、元來迷悟凡聖地獄天堂の  
 撰ぶべきは無いのよ、

事存函盖合理應箭鋒挂承言須會宗勿自立規矩

事理の二句は初めの方にあつた事を執するは元是れ迷理に契ふも亦  
 た悟に非ずと云ふ句と相表裏してあるやうに思はれる、ソコで此二句  
 は事と理と互ひに二句を掛け合せて見るが宜しい、ドウ掛け合はせる  
 どと云ふに事は理を存して函盖合し箭鋒挂ふか如く、理は事に應じて  
 箭鋒挂へ函盖合するが如くぞと掛け合せて見るのぢや、理と云ふは理  
 想理論などと云ふので形に見えない所の本體、事は事物事實など、云  
 ふので形に顯はれた所の現象、これは事理不二と云て元來二つもので  
 は無い、然るに凡夫は皆一方に片寄て理論ばかりコチたり事實ばかり  
 ヲラマイたりして居るから、元是れ迷亦た悟に非ずと叱られる、今はハ  
 ヤ事理互ひに存應して函盖の合するが如く、箭鋒の挂ふるが如くてあ  
 ると云ふ、函盖合すと云ふことは函はハコで盖はフタぢや、ハコとフタ



とがヒタリと出合ふて、好く出来た印籠や茶入などのスィツと這入ると風の通る隔間も無い様子、函蓋と二つに云へば二つのやうなもの、其合した所は二つとも一つとも名けやうは無い、天地間の萬物萬象皆此通りで無ければ成らん、蓋ばかりでは蓋の用を爲さぬは勿論、蓋と云ふ名のあるべきはずも無い、函ばかりも其通りである、箭鋒拵と云ふは列子にある故事で、妙な昔話ぢや、紀昌と云ふ人と飛衛と云ふ人は二人ともに弓の名人で、ドチラも己れ一人と思ふて居たから、紀昌は飛衛さへ無ければと思ひ、飛衛も亦た紀昌を殺してしまひたいと思ふて居た、然るに或時野中で出遇ふたのを幸ひに、互ひに手馴の弓を引しぼつて、只一箭にと切て放したところ、兩方の箭簇と箭簇が途中でガチリと出合ふて下へ落ちた、ソコで兩人とも互ひに嗚呼名人であると感心しあふたから、モト殺す氣が無くなつたばかりで無く、互ひに手を執

りあふて兄弟の義を結んだと云ふ話、それを今こゝの譬に引かれたので、一切の事理圓融無礙一切處一切時に涉入通達自由自在の有様を形容せられた、何事も此通りにさへ往けば警察署も裁判所も入用は無い、政府と議會とゴタ／＼することも無いはずよ、サテ次の二句に言を承けては、須からく宗を會すべし、自から規矩を立ること勿れ、こは近くは佛祖の道を修學する者を誡め、廣くは凡そ世間一般の都べての事に處する標準を示された、文の大意を申さは、凡そ佛經を讀ても祖錄を研究しても、乃至師匠や朋友の言ふ所を聽ても、其文字言句に拘泥せず、其宗とする所を會得せねば成らぬぞ、若し其宗とする所が分らんで、自分勝手に定めて置ては、謂ゆる杓子定木に落入て、決して眞理實相を見ることが出来ぬぞ、大仙心を悟ることが出来ぬぞと言はれたのである、此れも言の字にツキ廻つては、ツマランことに成る、言を承けてはと云ふ



のを何事に就けてもと翻譯して見るが好い、飯を食ふに就けても着物を被るに就けても百姓するにも商賣するにも皆其宗とする所が無ければ成らぬ、宗の字は元來本家と云ふ字で尤も大切に作る大本と云ふことである、何をするに就けても其事に就て尤も大切とする大本が無ければ成らぬ、然るに若し其大本を忘れて自分勝手に規矩を立て、は決して其眞理を得られぬは勿論のことぞ、規矩と云ふは規は曲尺で物を四角にする道具、矩はブシと云ふ者で物を圓くする器械ぢや、是等の道具器械は自分だけに己れは是れて圓いと思ふとか、是れて四角だと思ふとか云ふ當推量ては決して往けん、ソコで佛祖の道は佛祖の證明を得ては、恐らくは未得謂得未證謂證の邪路に落ることを免れぬ、其れゆゑ古人は正師を擇べと云ふことを頻りに言はれてある、會の字は申すまでも無かるうが我國の俗に合點するとか得心するとか

云ふ意味を支那の俗語に會するとも會得するとも云ふのである、

**觸目不會道、運足焉知路、進步非近遠、迷隔山河固。**

觸目と云ふは目に見える其儘と云ふことぢや、是れも目に限つたことでは無い、觸耳、觸鼻、觸舌、觸身、手に觸れ、足に觸るゝまゝ、イヤ觸れるばかりでは無い、其反對で背目、背耳にも直に大仙心の眞道を合點せんければ成らぬ、日は朝々東に上り、月は夜々西に沈む、鴉はカー／＼と鳴き、雀はチュ／＼と囀つる、之を見る、之を聞く、到處直下に大道を會得せんければ成らぬ、宇宙萬象皆そのまゝに大仙心の現成公案ぢや、其れを外にして道を別處に求めやうと思ひ、方角の遠ふた處へ幾ら足を運んで往ても焉くんぞ路を知らんとある、足を運ぶと云ふは修行することに譬へたので、幾ら修行して骨を折つても方角違ひては何の役にも立たぬぞと云ふのぢや、東京に住て居る者が松島見物に往かうと云ふのに



品川の方へ出掛けては、歩けば歩くほど松島へは遠くなるやうなものよ、餘處目から見ては如何にも感心じやなどと人に言はれる佛教者も無いではないが、其喉嚨を抑へて穿議して見ると、飛だ外道の見に落入て居るのが我々が見てさへ知れるのが幾らもある、況んや佛祖の御照鑑てはサゾかし御落涙の乾かせられる暇の無いことと有らうと思へば、誠に恐れ入た次第である、歩を進むるも近遠に非ず迷ふて山河の固を隔つ、此二句は足を運ぶも焉くんぞ路を知らんと云ふことを一層進めて確かめたのぢや、近遠に非ずと云ふは近いとも遠いとも名の附けやうか無いと云ふほどのこと、徒づらに路頭に迷ひて居るのであるから、山河の固を隔つとある固は險固と云ふこととて、道路の困難な有様昔し東海道を京都へ上らうと云ふには箱根山の八里の峠で中々困難をしたものである、今では一時間ほどの間に七八の隧道を寝て、通れば

直に駿河の海が見えるが昔は僅かに八里の路で足を傷めないものは無かつた、然るに其れよりも困難なるが大井川で、箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川と云ふ歌を謠ふたが、實に其通りに違ひないので、大夕立の一つも來ると直に川留になると、ドンなことをしても通さんのであるから、誠に山河の固であつた、然し其れが超えられるのなら幾ら固ても好いが、今のは隔つと云ふのである、結局目的の處へ往きおふせることが出来ぬぞと云ふことである、然るに之に反して、觸目當處に大仙心の眞道を會得さへすれば、足の擧げ下しが其儘大仙心の當躰ぢや、古人が至道無難と言はれたのも、歩々踏躰す、緑水青山と言はれたのも、皆その風景よ、

謹白參玄人光陰莫虛度

此句はいよく、此一篇の結勸である參玄と云ふ二字は、肇論に出て居



ると云ふことだが、其れより前に老子の「道德經」の「玄之又玄衆妙の門」と云ふてあるの、幽玄だの玄妙だのと熟字させて物事の道理の至て窺ひ難い所を形容する詞に成て居る、一鉢に此字は天地玄黄などと云ふた時に黒いと云ふ意味である、其黒いと云ふ所から物の綾目の見え分かれと云ふ意味になり、其れから遂に不可思議微妙の形容に成たものと見える、ソコで佛教の道理の不可思議微妙なる所をも玄妙とか幽妙とか云ふことに成た、サテ其玄に參ずる人を參玄の人と云ふので參は即ち參同契の參の字、物と物とが交渉すること、中庸「やうに吾々人間が天地に參はると云ふたも同じ意味、吾々愚迷の凡夫であるけれども發心修行して佛祖の大道と交參することが出来る、ソコで佛道修學の人を稱して參玄の人と云ふてある、次の一句は辨ずるまでも無からず、禪の根本思想とも云ふべき參同契の大意は、先づ「サツ」と是の如きも

のである、決して禪宗といふものが後世の猥りに活達豪放なる言行ばかりを主としたものでないといふことも、自づから此邊で諒知せんければならぬのである、此の「參同契」に續いては洞山大師の「寶鏡三昧」および「五位頌」であるけれども、具體的に垂示せられたものは、此の「參同契」に過ぎたるは無いと思ふ。

題書

溪聲山色大慈悲 說法熾然聽者誰 眉山築著有聲齋  
 輕川磁著無聲詩 飄々居士沒伎倆 獨擊石磬歌紫芝

十六羅漢贊

十六尊者 其名云何 高山流水 斷雲殘霞 片月疎雪  
 落葉飛花 素琴鐵笛 苦茗甘瓜 死貓盲蛇 此他眷屬  
 數如稻麻 十方三世 遊化無涯 可敬可禮 得福無差

達磨以塵尾柄搔背圖

虛空生金窟 羅曼患背痛 蚊子嗜胡僧 塵尾哭而慟  
 參 同 契



青巒禪話

搔着痒處否 勿誤傷虛空

羅漢圖贊

解虎又降龍 畢竟屬兒戲 遺法之護持 亦是何閒事  
請看天高地低邊 山風吹月溪流翠

出山像贊二首

山中雲霧々 山下草漫々 來往八千返 脚跟常不安  
河頭賣水去 憐他隻影寒 復出家山去 前程安在哉  
八千返往來 不覺路崔嵬 一段春光上老梅

船子和尙

船中之主 海中之賓 正偏無跡 誰復問津 嘆  
後山忽催雨 前岸別有春

丹霞燒佛圖

一片爛枯木 焚燒堪禦寒 誰言收舍利 莫做佛陀看  
請見爐中火 灼々照大千

寒山拾得贊

山巔雲漢々 山下草離々 山中誰家子 踏跟相追隨  
金經與竹帚 弄甌耽戲嬉 來去無人識 唯留五言詩  
吟誦欲追跡 杳不知所之

第二 默 篇



## 二、禪 辨

禪宗と謂ひ禪學と謂ふ若し今時の人の云爲するが如きものなりとせば、禪宗と云へるものほど淺近なるは無く、禪學と云へるものほど容易なるはなからべし、何が故に古人は此事の爲めに二十年三十年刻苦精勵して而して尙ほ其證し難きを歎きたるぞ、雲岩道吾は四十年の辨道と稱し、船子は藥山に在ると三十年、南嶽の曹溪に參する十五年、雲門は香林の遠を接すること十八年、日々只遠侍者と呼ぶ、遠云く諾、門云く是れ什麼ぞ、是の如きもの十八年にして始めて方に悟る、門云く我れ今より後更に汝を呼ばずと、雪竇之を讚揚して云く我は愛す韶陽の新定機、一生人の與に釘を抜き楔を抜くと、古聖先徳の諸善知識に參學して實地の修行に精勵したる概ね皆是の如し、然るに今時の人の參禪と稱す



るものを大觀するに、多くは是れ禪錄を涉獵して古則公案の聊か己れの解會し得るものを暗記し、其言句の假聲を弄し、其動作の模擬を習ひ、言行を奇怪にして以て我れ禪を會せりと謂ふ、是れ其尤も今時に流行する所のもの、更に之より勝れりと爲すべきは、とにかくに禪は實參親證せざる可からずと稱し、己れの信仰する所の宗匠に就きて其道を問ふ、宗匠の之に對する大凡二流あり、一は謂ゆる看話禪と稱せらるゝ者にして、一は即ち默照禪と目せらるゝ者、二流相嫉視して、他は是れ、盲坐のみと罵しり、彼は是れ妄分別のみと誇る、而して二者皆邪路に踰躡することは一なり、彼の謂ゆる默照なるものを看よ、佛祖の正傳せる只この坐禪あるのみ、坐禪は三昧中の王三昧なり、兀々として坐定するとき、は凡聖なく迷悟なし、佛經尙ほ且つ看るを要せず、况んや祖錄をや何の閑工夫ありてか古則公案を拈弄せん、只管に兀々として端坐せよ一日

坐すれば一日の佛なり一時坐すれば一時の佛なり、一生坐する是れ一生の佛、生々世々に坐する是れ生々世々の佛のみと然り而して其事の尤も勝れたるものにして、彼の外道の無想定にも及ばず、何ぞ二乗の滅盡定にも如かんや、其人固より無想滅盡の名義だも知る者稀なるが故に、彼れが爲めに其邪正を辨ずるも復た通すべき無し、此の如き者を以て之を佛祖の大道に擬す、盲坐めくらざの謗り豈辭するを得んや、蓋し默照とは大慧かつて宏智を評するの語、而して宏智笑てこれを甘受し默照の銘を爲る、豈今時孟浪たる者の窺ひ知る所ならんや、抑も宏智正覺禪師は法幢を天童山に建て、大慧宗杲禪師は爐鞴を徑山寺に開く、蘭菊らんきくの美を一時に擅にして、與奪互ひに祖道を光揚す、俱に是れ權化の善巧のみ、宏智常に坐禪を奨勵す、然れども亦曾つて公案を等閑にせず、乃ち頌古一百則を著はして參學の徒に資せり、我國曹洞の高祖承陽大師甚



だ宏智の爲人を慕ふ、而して坐禪を専らにすること更に之より甚だしき者あり、然れども自から碧巖集を騰寫して始て之を日本に傳へたるは即ち大師の偉勳なり、大師又公案三百則を集めて之を正法眼藏と名け、序を撰て之を後昆に貽せり、如何ぞ其流を汲ひ者にして古則公案を等閑にし視ることを得んや、昔し百丈その徒瀉山に示して曰く佛性を見んと欲せば當に時節因縁を觀ずべし、時節既に至れば迷て忽ち悟るが如く、忘れて忽ち憶ふが如し云々、謂ゆる時節と云へるもの其早晩を期すべからず、謂ゆる因縁と云へるもの其種類を定むるを得ず、世尊は明星を見て悟入し、觀音は聞性に達して圓通し、香嚴は竹を聞き、靈雲は桃を見る、晦堂の語録に於ける、永嘉の維摩に於ける天台の法華、圭峰の圓覺、法々みな心を明らむべく、塵々みな道に入るべし、故に謂ふ牆壁瓦礫みな大光明を放ち、水鳥樹林ことごとく念佛念法念僧すと、况んや是

れ佛祖の言教、古則公案いづれか其れ廣大因縁ならざらんや、只古人道眼明朗にして機を鑒るに熟したるもの、時に應じ變に隨て與奪把放もとより定規なし、然るを後人あやまりて柱に膠し株を守る、笑を天下に取らざるもの幾と希なり、豈悲しからざらんや、又彼の謂ゆる、看話禪と目せらるゝものを視るに、未だ曾つて禪定の何たるをも知らず、僅かに一則の公案を授かりて、分別計度に心識を疲らしめ、精神茫然として狂するが如く、夢みるが如く、眼を怒らし齒を叩き、或は一夜或は兩三日、恍惚として重擔を卸すが如く、言行忽ち舊時に似ざるもの有り、師家或は之を許して大事了畢せりと爲す、之を許されたる歡喜踊躍手の舞ひ足の蹈むを知らず、吾れ已に見性せり、吾れ已に悟道せりと、而して其實を顧りみれば楞嚴經に擧る所の五十魔境中其隨一に居らざる者幾ど希なり、然れども此の如きは其最上等なるもの、更に之より下れる者に至



りては、窃かに公案の語脈を探りて其道理如何と研究し、妄想分別の頂上に到達して之を透關と爲す、而して其人大概未だ曾て結跏趺坐の法をも知らず、之に對して生死岸頭の事如何と問へば、固より其何の謂たるを知らず、此の如きにして之を禪宗と謂はゞ、謂ゆる禪は世の心學道話にも及ばざるべし、亦た何の尊勝か之れ有らん、昔し竺尙書、長沙の岑和尚に問ふ、蚯蚓斬て兩斷と爲す、兩頭俱に動く、知らず佛性那頭にか在る、沙曰く妄想すること莫れ、尙書曰く動するを如何せん、沙曰く只風火未だ散ぜざるが爲めなり、尙書無對、沙、尙書と喚ぶ、尙書應諾す、沙曰く是れ尙書の本命にあらず、尙書曰く即今の祇對と離却して第二箇の主人公あるべからず、沙曰く尙書を喚て今上と作すべからず、尙書曰く與麼ならば則ち總に和尚に祇對せざる是れ弟子が主人公なること莫しや、沙曰く但祇對するのみに非ず老僧に祇對せざるも亦た無始劫よりこ

のかた是れ箇の生死の根本なりと、乃ち頌を示して曰く、學道の人眞を知らざるは、祇だ從來識神を認むるが爲めなり、無始劫來生死の本、痴人喚て本來人と作すと、看よ彼の公案を工夫せりと稱して、妄分別を逞くし、主人公に相見せりと稱して、意識の計度を尊崇するもの、誰れか其痴人たるを免るゝものぞ、而して其弊源や全たく定力を等閑にするに在り、大慧かつて示して曰く他人は定を先にし慧を後にす、吾は慧を先にし定を後にすと、遂に頌を打して曰く、老胡九年話墮す、惜むべし當時放過せることを、默照の徒をして鬼窟に長年打坐せしむることを致すと、是れ其宏智一流の只管坐禪を専らにするを評したる語句にして、大慧が定慧を論ぜるの標準なり、看よ大慧は定慧の先後を説くと雖ども只慧だに有れば定を要せずとは言はず、定と慧とは其道程なり、而して之を先後するの行歩の便利のみ、大慧既に然り宏智の定を先にして慧を



後にする豈復た一時の方便ならざらんや、而して宏智敢て大慧を評せずと雖も、大慧は口を極めて宏智を罵し、其罵しるや達磨を併せて之を罵し、宏智の之を甘受して黙照の銘を作る亦た宜なる哉、然るに今人未だ曾て二老の唾涕だも嘗むること能はずして、而して妄りに二老の唇吻を模擬す、邪路に跲せざらんと欲するも得べけんや、古人曰く定慧等しく學んで明らかに佛性を見ると、嗚呼是れ祖道の正路ならくのみ、定慧の等學これを禪學と謂ひ、佛性を明見する之を禪宗と謂ふ、定に四禪八定あり、外道禪あり、二乘禪あり、然れども實慧に即して真定に入る、之を佛祖正傳の三昧王三昧と稱するなり、何ぞ枯木死灰底の盲坐を以て之に擬すべき者ならんや、慧に顯密聖淨あり、四教五教あり、五時三時あり、然れども真定に即して實慧に入る之を佛祖正傳の大光明藏と稱するなり、何ぞ意識妄動底の獨斷を以て之に擬すべき者ならんや

誠に夫れ佛祖單傳の真定、言外領略の正宗は必らずしも坐禪經行の中に在らず、必らずしも古則公案の中にも在らず、必らずしも佛殿僧堂の中にも在らず、必らずしも東司浴室の中にも在らず、必らずしも言句伎倆の中にも在らず、必らずしも風花雪月の中にも在らず、只其れ時節因緣到來するときは、則ち劒樹刀山の巔に三世諸佛を捕捉することも得べく、八功德池の汀に十方諸魔を禮拜することも得べし、何の時節か是れ其時節なる、何の因緣か是れ其因緣なる、腦後に豁開す真密の路、面前識らず好知音、只要す放過せざらんことを。

### 三、禪教分別

佛教の分類 釋尊の教といふものは種々に之を分けられてある、釋迦如來三十の歳から八十の歳まで五十年の間、人を御教なされた、其の間



に御説きなされた所の經文が如何にも廣大なることで、それを支那に翻譯したものが五千四十八卷、それは千年も前に既に五千四十八卷である、其中に説かれて居る所のは實に種々様々なことがある、譬へば良醫の病を知て藥を説くが如して上手な醫者さんが續密に診察して、さうして病人に相當な藥を與ふるやうなものである、病人が千差萬別であるから、藥も亦千差萬別になる、世間の醫者さんが肉體の病人を診察療治するのでも、バツプで温めることもあれば、氷を以て冷やさせるともあるやうに釋迦如來が衆生を濟度なされたのも種々様々に之を温めることもあれば冷やすこともあつて、一例を以て律することが出來ない、それを後の人達が色々部類を分けて居る、先づ大體に於て古い所から申しますると大乘、小乗と分けてある、大乘と云ひ小乗といふことは讀んで字の如く、小乗は小さい乗物、大乘は大きい乗物と

いふことである、そこで大乘といふ方は己れ一人のことでない、一切衆生如何なる人でも皆悉く悟らせるといふのであるか、小乗は之に反して自分一人である、其小乗といふ中に就ても是が二十程に派が分れて居る、大乘といふ方が又更に種々様々に分れて居る、其分れたのが即ち今日の種々なる宗旨の起つた所以である、其種々の宗旨と云ひますのが大體二つに分れてある、顯教と密教といふ、密教といふのは眞言宗である、其外は皆顯教、天台宗、日蓮宗、淨土宗等皆悉く顯教である、そこで又其顯教といふ中に付て更に聖道門、淨土門とに分ける、聖道門といふ方は天台宗であるとか、日蓮宗であるとか、禪宗といふものも其中に入るやうになつて居る、是は自分の力を以て修行をして悟を開く、淨土門といふ方は自分の力を以て悟を開く譯にいかぬ、即ち如來の本願を頼み彌陀如來の名號を力として自ら悟るのではない、佛の方から悟らせ



て貰ふ之を他力と云ふ、然るに是等の者を皆悉くおし括めて教家といふ其教家といふものと相列んで一方を禪家といふ、即ち顯教の中に於て一は聖道門て一は淨土門其聖道門の中に於て又一は教家、一は禪家斯ういふ風に分つて居る、之を悉く皆歴史及び教理に依つて御話すると益々明瞭になるけれども、其れはなかなか僅な時間に及びもないことであるから、今は大體だけ申して置きます、

教と禪　そこで先づ其教家の方の事が解つてくれれば始めて其禪といふものがそれと違ふことが解るのである、是が現在日本に在る所の宗旨で云ふて見ますれば、前の小乗といふものだけが宗旨になつて居らぬ、唯學問としては傳はつて居るけれども、小乗の宗旨といふものが日本には無い、奈良の頃の俱舍宗といふ宗旨、成實宗といふ宗旨は小乗の方であつたけれども、他の三論宗、法相宗といふ宗旨の附屬になつて居

たので、別に宗派は成り立たなかつた、別に宗派の立つて居るのは皆悉く大乘の方ばかりである、今在る所の諸宗各派の名の上で云へば密教と稱へる眞言宗の外は天台宗でも、日蓮宗でも、淨土宗でも、法華宗でも皆顯教といふ方であり、又謂ゆる教家といふのである、是等を一々お話すると大層むづかしいことになるし、時間を費しますから省きますが、大體教といふ方はさういふ譯であります、

是は一體何んの爲めに御説きなされたのであるかと云へば、結極の目的とする所は禪に在る、此禪と云ふことを現はすが爲め、其方法、手段、手續として或は小乗と説き、或は大乘と説き、同じ大乘の中に於ても顯教も密教も皆悉く禪に至らしむるの手段手續である、結局御釋迦様の目的は禪より外に無いといふことになる、それで何の宗旨でも結局に往つた時は必ず禪にならなければならぬのであるから、禪といふものが



別に一つの宗旨となつて居るべきものではない、諸宗各派ともに未だ禪にならぬのならば總ての宗旨はまだ其の目的を達して居ない、また途中の手續中に居るのであるからまだ目的は達して居らぬのであつて、結局は禪に到らなければならぬ、然るに此禪といふ名稱に就て爰て更に説明を要することになつて來る、此の禪と云ひまする言葉が一體に所謂やゝこしくなつて、餘程氣を附けて聽いて戴かなければならぬと思ふ、今世間の人が皆禪宗といふ此禪宗といふ名は元來餘所から附けたものであつて本からあつた名ではない、それで曹洞宗の宗祖越前永平寺の開山の承陽大師の如きは禪宗といふことを謂ふてはならぬ、曹洞宗といふことを謂ふてはならぬ、我傳へたる所のものは禪宗ではない、我傳へたる所のものは曹洞宗といふやうなものではない、何であるか、佛道である、斯うまで仰せられてある、けれども外から禪宗と

か曹洞とか謂はるゝものだから已むを得ず自らも謂はないければ話が出来ないことになつて來るのである、已むを得ずして自ら禪宗といふ場合もあり、或は曹洞宗といふ場合もあるけれども、結局は禪宗とか曹洞宗とか名くべきものではなくて、唯佛道と謂ふべきであるといふことを承陽大師は正法眼藏の中に明かに御示しになつて居る、詰り世間で之を禪といふて居る限りは已むを得ず、其禪といふ言葉に就て其差別を明にする必要がある、普通世間で禪と稱へる所のものはどういふものであるかといふとは是は天竺の禪那といふことである、之を支那の言葉に翻譯すれば靜慮又は正思惟と云ふ我々御互の心は亂れたものである、心の治りがないのである、それを治めるのが即ち禪那である、我々の心は種々様々なことを思ふ其思ひがやゝもすれば邪まになる、それを矯め直して我々の心の正しく働くやうになるのが禪那である



さういふやうなことであるならば何の宗旨でも禪那でなければならぬ、天台宗でも眞言宗でも、淨土宗でも、禪宗でも、皆悉く禪那といふことがなければならぬ、禪宗の如き自力自證の宗旨とは全く反對に他力といふことばかり主張する淨土眞宗の如き即ち本願寺流の如きは自分の方では何も考へるには及ばぬ、皆彌陀如來に御任せする宗旨であるけれども、此靜慮又は正思惟といふとはやはり大切なことであるから我々の心を落付け亂れないやうにする爲めに一心一向といふことが肝要になる、即ち心を一つにしなければならぬ、其の心が雜り氣のない純一の心となつて來なければならぬ、一向といつて一方むきになつて仕舞つて他を顧みないやうになるのであるから、それてなか／＼此靜慮といふことに骨折られなければ彌陀の本願を頼んで往生することは出來ないことになる、況や其の他の宗旨は自力の修行をしなければ

ならぬ、それには皆禪那の修行をしないものはないことになる、さうすると禪といふことがさういふ意味であつたならば、禪を以て一つの宗旨とすべきものではない、何處の家に往つても飯櫃と雪隠は必ずあると云つたやうなもので、飯を食ふ人の居る家には飯を入れるお櫃がある、お櫃があれば雪隠もなければならぬのである、さうすると雪隠宗だのお櫃宗だのといふ獨立のもののある筈がない、これと同じことで各宗各派みな悉く禪那でない宗旨はない、それであるから承陽大師が我宗を禪宗などといふことはならぬと言はれたのは、其點から別段に限られし所のものでないといふことを言はれたのである、去りながら設ひ餘所から言ふたにもせよ、既に禪宗／＼と名を附けられた其餘所から言はれた名を已むを得ずして自ら探て假りにも禪宗とか禪學とか稱する上には、其の禪といふことを説明する場合には亦已むを得ず



禪と稱するのであるけれども此時の禪といふ名義は彼の普通に禪那と云ふ時の禪の字とは自づから其の意義が違ふことになる、即ち單に靜慮とか正思惟とかいふことでは無くなつて來るのである、其れはど  
うなるかといふに、禪といふことは總ての力の極端に達した時に現は  
れて來る最大終局のものが即ち禪である、已に總ての事柄といふので  
あるから、佛教の學問修行とか坐禪とかいふ事ばかりではない習字を  
しても三昧線を彈ても碁を打ても馬に乗ても、乃至飯を食ふにも、着物  
を着るにも、何事も皆其絶頂是より上が無いといふ所に往た時には言  
ふに言はれぬ味ひが起つて來る、そこが即ち禪である、乃ち禪といふこ  
とを今假に斯う定義をつけて置いて而して、其意味を御話するのである  
其處に至らぬければ所謂禪宗といふものゝ本當の度合に達すること  
は出來ないのである、其處まで往つたならば口で言ふことは決して出

來ないそこで言語道斷といふことになる、言語といふことは我々が物  
を言ふことである、物を言ふ道が斷えてしまふ、例へば食物一つ食べて  
も、旨いとかまづいとか、辛いとか、甘いとかいふて居る中は、まだ言語道  
斷でない何んとも言へないといふ所に至つた時が即ち言語道斷であ  
る、口で言へないばかりでない、心の中에서도どうとも考へることが出來な  
いといふ所に至つたならば心行處滅である、それ故に禪の味ひは色々  
に譬へを以て已むを得ずいふのである、昔から能く言ふことであるが  
或人が畫工に向つて風を描いてくれと頼んだ、花鳥風月共に皆我々の  
眼も耳も心も慰むる所のものであるが花であるとか、鳥であるとか、月  
であるとかいふものは明かに我々の心に想像することも出來るし、形  
象を描くことも出來るのであるが其中に風と云ふものを畫に描いて  
くれと云ふ、これはどうも畫に描く譯にいかぬと斷つたが、無理に頼む



ので、其畫工は非常に氣轉の利いた人であつて、柳の枝が風に靡く有様を書いた、それで風といふものが確に見えて居る、風として描く譯にはゆかぬけれども、柳の枝に風の當る有様を書いた、どことなく風の姿が方弗と見えるけれども、それは已に柳に風が當つた時は斯んな姿のものだと知つて居ればこそ解るのである、若しも未だ曾つて柳に風の當るのを見たことのない者が其んなものを見ても、少しも分らぬけれども、畫工には此れ以上のことは出來ないのである、其處まで往つた時に始めて言語同斷、心行處滅といふことが幾らか分るのである、

思想の階段 更に方角を變へて言ふて見れば、總て世の中の物事は何事でも、例へば山でも海でも木でも草でも、寝るのも起きるのも總ての事に三段の階級を経るといふことがある、三段とは一番最初は極めて單純なものである、然るにそれがもう一步進むと複雑になる、それが又

もう一段進めば更に元の單純に戻る、是は總てのものがそうなるのであるから、何の例を擧ても宜いけれども、我々人間の子供から老人に至るまでの經歷から云ふて見ても、子供の時には總てが皆單純である、心の中に蟠りが無い、然るにそれが成長するに隨つて色々智慧が附いて來て、心の働さが複雑になつて來る、然るにそれがもう一つ進んで老年に至ると又單純になるのである、學問にしてもさうである、一番最初無學なものは全く物を知らぬのである、智慧も才覺も何んにもない、是が段々學問が進んで來ると所謂複雑になつて來て色々な理屈を捏ねるやうになる、けれどもそれをもう一つ通り抜けるといふと元の單純になつてくだらない理屈は言はない、能くも互が學者先生達に交る上に付て其三段の階級が能く分る、無學の人は固より何んにも知らぬ、所が二段目の學問の出來て居る人達、さういふ人達は色々なことを澤山知



つて居る、書物もタント読んで居る、人の話も澤山聽いて居るから、誰と言ふ人は斯う言ふた、何といふ書物には斯うあるといふやうに色々なことを言ふ、それ等は、大層其人の知識を現はす譯である、けれどもそれが邪魔になつて、自分の眞實の智慧が却つて無くなつて居る、能く學者達が古人の誰某が斯う言ふた、何の書物には斯うあるといふことを承る、所があなたは一體どう思召すといはれると、私の説は別にないといふやうな學者がある、さういふ學問を嘔吐學問といふ、食べ物も其儘に吐き出す、自分の腹の中で消化することが出来ない、汁は汁、飯は飯、漬物は漬物、そのまゝで吐き出すので、ヘドを吐くやうなものである、然るに其れが健康なる胃中に消化せられた時には飯も汁も漬物もみな一緒になつて混然たる單純なるものになつてしまふ、即ちそれが尙ほ複雑なものである間は、未だ我血肉にはならぬ、即ち三段に至つて單純にな

らなければならぬ、世間の事が皆茲に往くやうである、然るにもう一つ是が進んで往くと其單純なものが更に複雑に戻つて來なければならぬのである、そこに至つて始めて此禪といふものゝ味ひが分るやうになる、前に言つた顯教とか密教とかいふものが第三段の單純な所まで往くけれども、もう一つ進んで更に元の複雑に戻るといふことが、所謂禪といふものゝ立場である、それであるから禪といふものは特別にあるものではなくて、總ての學問總ての宗教の其絶頂まで至り果せた所が即ち禪といふものになるのである、

唯我獨尊の眞意義　其禪といふものが御釋迦様の上ではどうなつて居るか、御釋迦様の禪は一體何處まで往つて居るのであるか、詰る所は天地萬物世の中にあらゆる物柄、事柄、總てのものが其大本に立戻つたる有様が即ち禪である、それが御釋迦様が一番最初の時に言ひ現はされ



である。即ち御釋迦様が御誕生の時に、藍毘尼園といふ花園に無憂樹といふ花が盛んに開いて居る。此花の下で御母摩耶夫人が御産みになつたといふことであるが、御生れになると直に周行七歩と四方に七足つゝ進んで、真中に戻つて天地を指して、天上天下唯我獨尊三界皆苦我當安之、天の上天の下唯我獨り尊し、この世の中は皆苦みの世の中である。我將に之を安んずべし、其世の中の苦みの者を皆悉く安心さしてやらうと斯ういふことを言はれた。かういふ赤坊がそんなことを言つたのは御釋迦様の前にも後にも無いことである。さうして是が世間の考て到底分ることでない。此間、精神修養といふ雜誌に、獨尊號といふことと御釋迦様の御誕生の時唯我獨尊と言はれた其言葉に因んで多くの人達に書いて貰つた。其中に大隈伯爵の説といふのがあるのを見ると、流石に大隈さんは何事でもえらい考を有つて、えらいことを言はれる御

方であるけれども、世間の考を以て天上天下唯我獨尊といふとを考へるのであるから、途方途徹もない間違ひがある。此世の中は我獨り尊いといふ考を以て立つものでない。そんなやうな大それた考を以ては決していかぬのであるから、唯我獨尊といふことは空想だと言ふてある。大隈伯は幾らえらいことを言はれても彼の人は學者でない。宗教家でもないから恕すべき點もあるが、更に學者としても宗教の研究者としても自らも誇つて居らるゝ人て井上哲次郎といふ博士がある。此人が書いたものは、是は釋迦如來の如き人にして言ふべきことであつて外の人が斯んなことを言ふたら大變な害があると、斯う言ふて居る。そんなやうな考では唯我獨尊は扱て置いて、南無阿彌陀佛でも南無妙法蓮華經でも、總て宗教上の事が分るものではない。然らば釋迦如來が生れると直様天上天下唯我獨尊といふことを言はれたのは空想であらう



か法螺であらうか、決してさういふものではない、實に天上天下唯我獨尊——誰が天上天下獨尊であるかといふと、凡て我々人間は皆天上天下唯我獨尊であるけれども我々人間は天上天下唯我獨尊といふことを知らずに居る、それを釋迦如來が生きとし生けるもの、人間ばかりではない、總ての物が皆悉く天上天下唯我獨尊自身其ものが宇宙の中心に立つべきものであるといふことを我々が自ら知らずに居るのを御釋迦様が御教へ下された、我々御互ひ人間といふものが宇宙間の中に於て最も貴いものであるといふことを始めて宣言して下さつたのが御釋迦様の此時の言葉である、此御言葉に依て我々も皆釋尊と少しも異らぬ資格を有つて居ることが分つて來るのである、なぜかといふことになつては誠にむづかしいことになるけれども、一體天地間にあらゆる物柄事柄の總ての本體は本より平等一相のものであるのに何故

に山川草木人畜等と千差萬別の姿になつたのであらうか、是が古へから孔子も釋迦もソクラテスも皆心配された所である、我々御互ひ此世の中を見わたせば一つも同じものはない、人間の上から見ても馬鹿もあり、利巧な者もあり、富貴もあれば貧賤もある、生れて直ぐ死ぬ者もある、八九十まで丈夫で居る者もある、苦む者もあれば樂む者もある、どういふ譯で斯う千差萬別であらうか、之を研究するといふことは御釋迦様に限つたこととてなく、御釋迦様以前からさういふことを研究する學問、宗教とか哲學とかいふものが澤山ある、印度には御釋迦様以前から九十餘派もあつたといふことである、其心配のしやうが色々に變つて往くので天地萬物總ての物が此の如く別々であるけれども、此根源は何んであらうかといふことに就て、孔子は易學で安心された様子である、其易學といふのは、ヅツ前の時代から支那に有つたので、伏羲と



いふ人が八卦を劃し文王周公といふ人が之を説明した、それで孔子が易ばかりは何遍も繰返して御覽なされた様子で、昔は今のやうに紙も筆も墨もないから、竹に小刀のやうな者で字を彫り付けてあつた、それを籐のやうに繋いである、それを何遍もくく讀まれた爲めに、牛の皮で綴た其綴絲が三遍も切たといふ程に孔子は御勉強になつた、此上に五十年も此易を研究することが出来たならば大なる過ちはなくなるであらうと言はれたほどである、其易といふものはどういふことを言ふてあるかといふと天地萬物の根源とは唯一つの大極といふものである、其大極が自然に二つの働きを有つて居る、即ち陰と陽の二つの働きを有つて居る、之を兩儀と云ふ、其陰といふ方が下つて地と爲り、陽といて方が昇つて天となる、其陽が男と爲り、陰の方が女と爲るのである、素と大極といふものは二つに分れる性質のものであるから、其二つが又

分れて老陰老陽少陰少陽の四つになる、之を四象と云ふ、其四つになつたのが矢張り又二つづゝになる性質であるから、更にそれが八つになり、即ち乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤といふ八卦になつた、此八つのもものが互ひに離合して八々六十四になり、此六十四の中に天地間一切の物皆入れられないものはない、此六十四といふものは何から起つたかといふと乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八卦から起つた、其八つは老陰老陽少陰少陽の四象から起つた、其の四つは陰陽の兩儀から起つた、其陰と陽とは大極の一つから起つた、其大極といふものは今から七八百年前に支那の大學者が、大極は無極であるといふことを云つて居る、それで天地萬物は別々な姿に見えて居ても其本源は一つである、其一つがどうして斯う千變萬化するかといふに天命である自然に成つたといふとになつてしまふ、然るに耶蘇基督は之を何と見たか、天地萬物總ての物は別々である



けれども其大本はゴットといふ獨りの神様が御造りなされたのである。兎も角も世の中の總ての物が其元は一つであるといふことにして、孔子も其處に往つて居る、耶蘇も其處に往つて居る、御釋迦様は之を何と説かれたかといふに、此れは名も姿も異つて眞如と云ひ法性と云ふ、其唯一の本元がどうして斯う別々の姿となつたかといふと、因縁果報に依つて斯うなつたのである、神様が爲されたのでもなければ、自然になつたのでもない、總て其の現はれる所の因縁があつて其うなつたのであるから、自業自得、即ち自分の働きが種々の形で自分を現はすのであるといふのが佛教の因縁説である、今此扇子といふものは竹と紙と糊とが集つて出来て居る、紙が扇子か、糊が扇子か、竹が扇子かといへば、扇子は無い、總べての竹は扇子の骨にならなければならぬといつて竹藪に生へたものではない、紙にした所が倉に積てあり、店に列べてある

ものは何んである、唯紙は紙なり、竹は竹なり、糊は糊なりさうして扇子にも傘にも提灯にもなる、同じ竹と紙と糊と云つても傘が提灯の代りにはならぬ、扇子が傘の代りにはならぬのである、本體の上から言ふた時には一味平等にして差別がないけれども、各々其の因縁に依つて其形が變つた時に各々別々の働きを現はすのである、其別々といふ所に我々が執着をする、それだからあれの是れのと云ふて世の中は騒々しくなつて、警察署も裁判所も賑かになる、夫婦喧嘩も始まれば戦争も始まるのは何んであるかといふと、事物の別々の所にばかり執着をして其本元の一相平等を忘れるからである、一味平等なる所の本源に立戻ることが出来さへすれば、即ち我々人間の最も貴ぶ所を知ることが出来る、若し其本源に我々が立戻ることが出来なかつたならば誠に情けないものである、此五尺の體を我と思ふが、我といふものはどれ程のも



のか、五尺二三寸しかない、天地間はどうかといふと、天地間は限りもないが、我といふものはタッタ五尺しかない、タッタ五尺のものを我と自から局限したらは其の外に我といふものはない、其五尺の身體がどうかといふと、人生七十古來稀なり、此頃ては色々な統計表などを示される所を見ても、なか／＼我々御互ひの人間の定命、平均した命が昔から五十年などはない、日本などでは殊に餘り長生きが出来ないので、平均すると三十五六にしかならないといふ、それを大負けに負けて五十年されば限りの無い間に五尺の身體で五十年と極めて、我といふものゝ値打はつまらない者である彼の鶴を見るに五尺はないやうだけれども鶴は千年、龜は萬年といふとがある、それに對して人間はなすけなしいことになる、體の大きいのを考へれば鯨もあれば象もある、何から考へて見ても人間といふものはさう貴いものでない、けれども人間の値

打は何處にあるかといふと此五尺の儘宇宙と一つものである、五十年の儘に限りもない宇宙の時間と一致することが出来るのである、それを御釋迦様が一番最初に御示しなされたのであるから、即ち天上天下唯我獨尊と喝破せられた、凡そ天地間に現はれ来るものは皆悉く唯我獨尊である、一體に宇宙の中心は何物であらうぞ、若し太陽系の學問をずる人から云つたならば太陽中心といふ人もあらうけれども、それ等の事は小さい話である、一つの太陽系位の話は三千大千世界といふ話などに較べて見ても誠に小さい、況や三千世界を一佛土として此の娑婆世界から極樂世界に到る間にばかりも十萬億の佛土があるといふ限りもない話である、其限りもない所の中に何が中心であるかといふと、天地萬物總ての物が皆各々其中心とならなければならぬのである、茲にコップが一つある、此コップといふものは天上天下唯我獨尊であ



る、宇宙の中心に此コツブがあつて此働きを現はす爲めに此水差も必要となる、益も必要となり、大内青巒もコツブの働きを示すが爲めに此處に来て居る、諸君も皆此のコツブの働きを現はすために其處に集つて居るといふことになる、天地萬物總て此コツブの眷屬ならざるものはない、又此卓子の働を現はす爲めに水差もコツブも現はれて居る、即ち天地萬物總ての物が天上下唯我獨尊の働を具へたものである、それを我々は或小さい事に執着して居るから宇宙の本體を見ることが出來ないのである、それを釋尊が一番最初に宣言せられた、天上下唯我獨尊、是は到底理窟を以て説明することが出來るはずのものでない、それを姑く理窟を附けて私も現に話をして居るのであるけれども、我々が其處の悟りが本當に開けたといふ場合になつて來れば御釋迦様にそんなことを聽く必要はない、即ち我々御互に最初からさうなつて居る

のである、なつて居るものを我々が知らずに居ただけのこととて、自ら知つて見た時は御釋迦様の御世話になることはない、自分にも鼻の孔が二つ、口が一つある、御釋迦様も其通りであるから、御釋迦様の鼻を借りて呼吸する必要はない、我々自ら天上下唯我獨尊の働を現はさなければならぬといふとが自ら會得された時になつて見ると、御釋迦様にそんなことを言はれたのが誠に面目ない話である、であるから雲門といふ人が御釋迦様の誕生の日に言はれた言葉が面白い、若し釋迦が生れた時に我れ雲門が居つたならば一棒の下にブン擲つて、さうして犬に食はしてしまふはずであつた、さうすれば天下泰平であつたらうと言つた、何のことを言ふたのであらうぞ、途徹もない亂暴なことを言つたやうに聞えるが實に此宇宙萬象天地間に有りとあらゆる誠の働きといふものは、人の口を以て言ふべきものでもなければ、人の話を聽い



て合點出来るものでもない、自ら合點の往つた時謂ゆる冷煖自知する時に至りては、獨り自ら莞爾として膝を打つやうな時があるものである。故に雲門は御釋迦様の御恩を感じて必ず常に自ら感謝したのであらう、其感謝の心があつてこそ始めて打殺して犬に食はせるといふ洒落も出るのである、その意味が分らぬやうなことは決して禪といふやうなことの分るはずのものでない、

釋尊と公案 さて又禪に公案と云ふものがある、まるで謎のやうなことをいふのである、白隱禪師が隻手の聲を聴けといふことを言つた、どうも合點が往かぬ、それをとうとう終に好い加減に印可するとか何とかいふて許す、許されると自分が悟りを開いた心持になつて面白くなるやうなもので、其次の公案、其次の公案といふやうなことで、段々深入する者もある様子であるが、これも一應は結構なことであるが、そんな

ことだけで中々本當の禪が分るものではない、然るに御釋迦様の上ではどうであるかといふと、御生れなされた時に天上天下唯我獨尊と仰しやつた、此れが抑も公案の始まりである、しかし釋尊ばかりではない、我々人間は皆天上天下唯我獨尊であるといふことを合點が往かなければならぬ、其合點が本當に往つたならば、禪の必要はない、是は公案の一番最初であらうと思ふ、一體は一切萬事皆公案の現成であるけれども、其中から今の世に公案といふものに似たものを求むれば、御釋迦様の公案として見るべきものは幾つもある、それが從容録といふものゝ上に出て居るのが先づ二つある、其一つに或時御釋迦様が弟子達を大勢御連れになつて歩きなされた、或所の土地を指して此處に一つ寺を建てるが宜いと仰しやつた、さうすると帝釋天といふものが出て来て草を一本挿して御寺が出来ましたといつた、さうすると御釋迦様が



莞爾と御笑ひなされたといふ、まるで謎のやうな話だ、そんな事は講釋の場合には通り抜けてしまつて、言語道斷心行處滅の上の話である、此所へ宜しく寺を建立すべし、一體此所といふのは何處のことであらう、天竺で大凡三千年の昔、此所といふのは地理的に言ふことは出来ない、天々朝晩するとなすこと皆伽藍の建立である、商人ならば帳場に坐つて居ても、百姓ならば畑に鎌を持つて耕しながら、其所に皆伽藍の建立が出来るのである、朝な夕な、する事なす事、皆寺を建てつゝあるのである、然るに此所と云へば土地にくつ附いて廻るから、いつまで経つても此所の味ひがわからない、寺といへば直に寺に付き廻るから眞の伽藍が分らない、或時又御釋迦様が御說法をなさるが爲めに所謂講堂に御昇りになる、いつもであつたならば御言葉を以て御說法なさるはずである、然るに其日は講堂に御昇りになつたさう何んにも仰せにならない、御

昇りになつたと思ふと、文殊菩薩が傍から出て往つて、槌といふものを打つ、多くの人に注意を與ふるものである、それを鳴らして諦觀法王法法王法如是、サ、御說法は濟んだぞといふたとある、さうすると御釋迦様が說法が濟んだといふ御顔で座を下りて御仕舞ひになつた、即ち口で言ふといふことは枝葉の話である、我々が朝な夕な寝るも起きるも悉く佛法でなければならぬといふことが茲に現はれて來て居るのである、けれども更に具體的に小乗とか大乘とか顯教とか密教とか五十年の間御説きになつた、是は茲に至らしむる手續に過ぎなかつたが、さて多くの弟子達が其處に往く者は滅多にない、御話の解る人は澤山あるが、自ら其處に至り果せる人が滅多にない、一番終ひに御釋迦様が講座に御昇りになつて、いつもの如く說法を爲さる様子であつたが、其時或者が金波羅華といふ花を御釋迦様に上げた、其花をちよつと手に御



持ちになつて、それを拈つて一同の者に御見せになつた、八萬の拜聽者が、皆法を受取る積りて集つた者、彌陀の本願が有難いとか、南無妙法蓮華經の御題目が有難いとかいふとは誰でも分る、然るに花を拈つて御見せになつても誰にも分らぬ、皆が呆然として手の着けやうがない、さうすると一番上座に居た所の摩訶迦葉といふ人が御釋迦様の御顔をジロリと見てニコリと笑つた、そこで御釋迦様が我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬すと言はれた、この一事に依て此迦葉といふ御弟子を御釋迦様の家督相續人と定められた、一方は花を拈つて、一方はニコリと笑つたに過ぎない、是が禪宗といふ宗旨の一番初めてある、孔子が或時曾參といふ弟子を御呼びになつて、參や我道は一を以て之を貫くと仰しやつた、さうすると曾參は唯と答へた、他の者には何のととも少しも分らぬ、後で曾參に向つて其門人が聞く

と夫子の道は忠恕のみと言つた、それが果して孔子の道の全體であらうか、曾參が其時に問ふた門人相當に答へた丈けのことであらう、實は忠恕だの信だのと名を附けらるゝ筈のものではない、中庸に上天の載は音もなく香もなく其れ至れる哉とある、是に至つては孔子の道も亦禪である。

諸宗の究極する所是れ禪、そこで禪といふものは手近い所から稽古をして往くべき筈のものでない、天台宗でも、淨土宗でも、眞宗でもさういふとの修行を貫いて往つて結局の所が即ち禪である、御釋迦様が五十年の間に御説きなされた御經は大乗、小乗、顯教、密教であるけれども、其外に別に傳へることがあるのである、釋迦如來は之を迦葉に、迦葉は之を阿難に傳へた、阿難といふ人は御釋迦様の御側に三十年の間、離れずに居つた人である、であるから三十年の間の御釋迦様の御説法を皆



聞き覚えて居つたけれども、御釋迦様の御存命の間に悟りを開くことが出来なかつた、終に御釋迦様の御亡くなりその後兄弟子の迦葉から相傳せられて三代目の祖師となつた人であるが、それから次第く傳へて十四代目が龍樹菩薩、是が天台宗でも眞言宗でも祖師と仰がぬ宗旨はない、諸宗各派の高祖と仰がれる御方である、是は禪宗の方では十四代になる、それから十五代二十代と經つて、二十八代が達磨大師である、是が支那にござつた時は支那の天子は梁の武帝と魏の孝文帝支那が南朝北朝と二つに分れて即ち南朝の天子が梁の武帝である、此人えらい豪傑であつたけれども、残念ながら一代限りて天子の家は潰れて仕舞つたのである、此梁の武帝は學者であり殊に佛教には熱心であつた、達磨大師が支那にござつて大分後であらうと思ふが、梁の武帝が始めて會はれた、其時の問答が碧巖集といふものゝ第一則に載つて居る

梁の武帝が非常な自慢話であつて、朕は是まで佛教の爲めにはなかなか盡力をして居る、寺を建てたことは何百何箇寺、僧を供養したことは何々といふて自慢された、此の如く佛法の爲めに盡したが如何なる功德があらうかといふと、達磨大師が之に答へて無功德と言はれた、是が我々大に考へて置かなければならぬ所である、總ての事柄に付て功德を見るといふことは都べて本物にはならぬ、無功德でなければならぬ、親に孝行をする、君に忠義を盡す、さうするとどんな功德がある、そんなことを考へた忠義なら本當の忠義ではない、それでは賣り買ひと同じことである、總て無功德でなければならぬ、唯本性が現はれ本分が盡されたのでなければならぬ、水が物を濡すといふことは何の功德がある、火が物を焼くといふことは善であらうか悪であらうか、春になれば花が咲き、秋になれば紅葉が散る、此れは權利であらうか義務であらうか、



其れと同じく親に孝行するのは權利でもなければ義務でもない、孝行をすることは善か悪かと問ふたならば、これは善といふ、甚しきに至つては君に忠義を盡すのは臣民たる義務だといふやうなことを言ふ者がある、夫婦仲好くして妻を可愛がるのは權利か義務か、女房が亭主を慕ふのは善か悪か、善だとか悪だとかいふことは總ての標準にならぬ、飯を食ふのは善か悪か、そんなものではない、天地自然の道理が自然に活動するのである、然るに梁の武帝が佛法の爲めに働いたら功德があるかと問ふて、達磨大師に無功德と叱られた、此に於て武帝更に如何なるか是れ聖諦第一義と問ふた、一體佛法の尤も大切なる所は何處であるかと問ふた、すると達磨大師が廓然無聖と答へた、武帝が佛の道て一番貴いものは何處かと問ふたら、佛—そんなものはないといふの答である、宇宙萬象、悉く天上天下唯我獨尊である、別に佛だの菩薩だの第一義

だの第二義だのといふものを認める必要はない、やはり武帝には分らぬけれども、武帝はそれでも頭を下げない、更に問ふた、朕に對する者は誰ぞと達磨に聞いた、さうすると達磨は不識、即ち知らぬと答へた、武帝トント益々分らぬ、達磨は斯んな愚な奴を相手にしてもつまらないといふので、達磨が行つてしまつた跡で、梁の武帝が平生信仰して居る寶誌和尚が來た、そこで武帝が今飛んでもない坊主が來て、朕が歸佛の功德を問ふたら無功德だといひ、佛法の大切なるものは何處かといふと、そんなものは無いと云ひ、朕に對するものは誰かといふと、知らぬといふ、氣違ひのやうな奴であつたが、とうとう何處かへ往つてしまつたと言つた、然るに此の寶誌和尚は常に武帝を本物にしたいと思つて居たが機會がない、其途端其話が出たから寶誌和尚が言つた、あなたは其達磨といふ人が如何なる人であるかを御存じてありますかと言つた、さ



うすると武帝が不識知らぬと答へた寶誌和尚は其の達磨こそあなたが平生御信仰なさる觀世音菩薩が釋迦牟尼佛の佛心印を傳へる爲めに此梁國に來られたのでありますと云つた、さうすると武帝が非常に驚いて然らは何とかしてこちらへ呼び戻したいものであるといつて悔やんだ、そこで寶誌和尚がそれは御止しなさい、逆も彼の達磨が梁に戻るものではございませんと云つた、即ち此達磨といふのは何んであるぞ、そこで雪竇といふ人が批評して面白いことを言ふた、這裏還て祖師ありや、喚び來れ老僧が爲めに洗脚せしめんと言つた、此んなやうなことが禪の公案といふもので、支那以來多く傳つて來たのである、皆實地の修行に大切な要件である、然るにそれがとう／＼今日になつては、何の意味も分らぬ謎のやうなものになつてしまつて、色々妄想で分別をして心事を合點しやうとしても到底會得の出來るものではありま

せんから、自ら反省してそこに到達する時節が來なければ、全く御話に終つてしまふのであります。

#### 四、禪宗の特色

承陽大師の綿密なる家風と云ふものは實に空前絶後であつて到底智見解慧を以て窺ふべき所では無い、故に承陽大師の流義を本統に正傳することが出來れば、今日の曹洞宗は釋迦も御承知なく達磨も嗅ぐことの出來ない所のものが承陽大師に依て傳へられて居ると思ふ、然るに残念なことには曹洞宗の歴史が實に曖昧な者で到底能くは分らんが、傳記等の上に就て言行を考へて見ると、其唱への判然して居るものは承陽大師御一人をつたきりて、二代の孤雲和尚や、三代の徹通和尚などには何にも傳はつて居ないから其見識は何の邊まで進んで居つた



ものか、今日其法身舍利としては一も見ることが出来ない、次に四代目の太祖瑩山禪師になると信心銘の拈提、傳光錄、坐禪用心記等を拜覽すると、高祖の唱へとは幾分調子が違ふやうであるけれども、兎に角其見識を伺ふことが出来る。

是は少し枝葉に渉る話であるが、坐禪用心記と云ふものは普勸坐禪の末疏のやうなものらしい、信心銘の拈提に至つて稍々見識を見ることが出来るが、下つて五哲と稱へる人達に至つては少しは上堂の法語などに残つてあるのを見ても、臨濟も曹洞も殆んど異りはないやうだ、次に聯灯錄などと云ふものを見ると、餘り讀み力はないやうだが、然しながら其當時今より二百年三百年前頃に曹洞宗の寺の出來たことは大層なものだ、今日一口に一萬四千個寺と稱へて居る寺は、多くは皆其頃に出來たもので、是が出來た理由は、又別に御話することゝして、斯や

うに寺が澤山あつた位だから坊さんも澤山あつたに相違ない、其等の坊さん達は何をして居つたことやら、古い所では足利中世の文明、天文あたりから近い所では慶長元和あたりに出來た寺が多いのだが、其等の開山が何ぞ書いたものでも遺したかと云ふに大抵は何にもない、偶々書遺してあるものを見ても、是が承陽大師の御法孫かと珍重して見られる程のものは餘り見當らない、是より推測して見ると、當時は定慧共に非常に衰へて、志ある者は何處かて參禪しやうと思ふてもする所もなき状態であつたと見える、一方から見ると慶長以降徳川氏の政策に因て、大に殿堂樓閣の廢頽は恢復したやうであるけれども、僧侶の墮落は反つて甚しく、毫も一宗の隆替を顧みず唯名利にのみ吸々として、以心傳心の相承は全く伽藍相續の器械と變ずるやうな傾きを生じて來た、斯く僧侶の墮落が極點に達した時に日本へ來られたのが黃檗の



隱元と云ふ人である、此人は皆知つて居る通り臨濟系統の人である、全體支那の明末の禪宗と云ふものは彼方此方で勝手な稱へをして一種變つたものになつて、後世餘程其感化を受けたものであるが、隱元の弟子に木菴、即非、慧林、獨湛と云ふやうな人達がゾロ／＼やつて来る、一方では道者玄と云ふ人も来る、此人は矢張臨濟の系を引いた人て長崎まで来て居られる、此人は曹洞宗に大層關係を及ぼしたのみならず、曹洞派の方では明末の曹洞宗中興開山とも云ふべき鼓山の永覺及び其弟子の爲霖、道霈と云ふ人が日本に大層法縁を結んだので、或る有名な洞宗の老宿などは日本に居りながら遙に道霈に嗣法を乞ふた、面授も何にもなく兎に角弟子になりたいと云ふて丁度奥州あたりて在家の葬式に送り引導と云ふことをやる様に送り嗣法を支那へ注文したと云ふ位に尊とばれた坊さんも有たが、其れは日本へ來たららず、東臯心越と

いふ人は來たけれども水戸の一隅に留まり、臨濟の方の隱元は徳川將軍が非常に優待して朝廷に於かれても法皇が親ら參禪せらるゝと云ふやうな有様で、宇治の黃檗山が出來、随つて諸大名も自分の下に黃檗宗の寺を建てねば愧のやうに思ふて、長州や仙台を始めとして僅かな間に全國に澤山な寺が出來、其には又相當の學問のある坊さんが居つたものだから、非常に盛んなものであつたに引替えて、曹洞宗は寺は随分あつたが一向に振はなかつた、少し心ある人は木庵、即非、道者等に參ぜねば本統の禪でないと云ふやうな有様になつて來たから、其を憂へて曹洞宗は曹洞宗の宗義を立つて行かなければならぬと云ふて盡力し始めた人が月舟、卍山、及び天桂等の人々で、相共に日本の曹洞宗を復古しやうと云ふ考へてあつた、此外大中寺の交易、興聖寺の梅峰、瑠璃光寺の田翁などは例の宗統復古に盡力したのであるが、宗義回復の道具



として渡つたものは洞上古轍である、是は正しく支那の曹洞宗を中興する考へて、鼓山の永覺が書いた者である、然し古の軌轍は何所にあるかと云ふと參同契寶鏡三昧及び五位を以て永覺の考へを曹洞宗の人に知らせたが、是が日本に来るまでは曹洞宗の坊さんたちは、參同契寶鏡三昧と云ふ名さへも知らなかつた様子である、此事は能く承知して置かねばならぬ、何となれば、今日曹洞宗の坊さんたちが毎朝讀んで居る參同契寶鏡三昧と云ふものは、曹洞宗に取ては非常に大切なものと皆が思ふて居るであらうが、あれは二百年以來のこととしてしかないと云ふことを知らねばならぬ、其證據には其以前に出來て居る洞上聯燈錄を如何に繰返して見ても參同契寶鏡三昧の意味を言ひ現はしてある處は一個處もない、ズツと昔に上つて太源宗眞の法語の中に正偏五位と云ふ文字が鳥渡出て居るが、高祖は竟に一生涯のあいだ正とも偏と

も一言も仰せられなかつたのみならず、佛法若し正偏を以て傳ふと言はゞ焉くんぞ今日に至らんとまで云ふて居られる、尤も高祖は淨祖から寶鏡三昧と五位顯訣を授けられたと云ふことではあるが、正法眼藏九十五卷、廣錄十卷中には噂さも出て居らぬ、

然るに今日諸君が宗乘の研究をするに就て最も大切なるものゝ一として居らるゝものが、即ち此參同契寶鏡三昧で、是には天桂、面山、連山、指月、千丈と云ふやうな人達が皆大層に力を入れて、或は不能語、或は折本篇、報恩篇、吹唱等を著はし、曹洞宗の宗乘學者と云へば是を提唱しない人はないと云ふ有様であるが、こゝらあたりだけで古人の糟粕を嘗めて居るやうなことは、到底、承陽古佛の眞髓が分るものではない、  
扱て佛法中に於て禪宗だの、佛心宗だの殊に臨濟の曹洞のと云ふ名は以前は決してなかつたものであるが、今では禪宗とさへ云へば直に達



磨宗だとはかり思ふやうであるが、私は寧ろ此れは曹溪宗と云ふ方が適當であると思ふ。六祖以前と以後とを比較して見ると以前の様子は凡て唱へが繞路である、現に達磨が武帝に向つて無功德と云つたのも其意味を教理的に自分で解釋して居る、其の解釋に依ると矢張り天台や華嚴の教相のやうに判釋が出来る、然るに今日禪宗一般の唱へる所に依ると教相的判釋は出来ない、教相などは通り抜けてしまつて非常に超絶したものになつて居る、して見ると達磨の唱へられた點は決して六祖以下殊に臨濟徳山と云ふ連中が唱へたやうなものでは無かつたと云ふことが分ると思ふ、

其から降つて文字に表はれたものは餘りないが、確かにあるものは信心銘である、是等は皆教相に當て嵌めて維摩の講釋をするよりは樂に講釋が出来る、然るに六祖以後になつてからは全く様子が變つて來た、

御承知の「菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃」と云はれたのが六祖の宗旨である、此語に就ては往々誤解が生じて來て、或は斷見に或は空見に墮する者が多いと思ふ、故に此句の大體に就て研究をして置くことは一大問題で、我々の忽せにす可らざるものである、其處に行くと世界に澤山ある宗教とか哲學とか云ふものと我が佛教との精神が何處が違ふかと段々細かな所を考へて見ると、一向に其堺目が分らぬ、釋迦出世時代印度には九十五種の外道があつたと云ふが、是等に就ては私も深く研究したことはないが、中々高尚なものらしい、殊に勝論外道數論外道などになつては殆んど佛教と相驅逐するやうに思はれる、其の他孔子ソクラテス基督などと云ふ人の言つたことと同じ意味のことをば皆佛教から取上げてしまつて而して何處にか釋迦の獨特の宗旨即ち佛教の專賣特許といふ所がなければならぬ、若し隣の店に



も其隣りの店にもあると云ふ品物なれば都合のよい所で買つて強ち釋迦の店で買はねばならぬと云ふ必要がない、果して釋迦の最尊無上なりと云ふ價值は何處にあるであらうか、此處を先づ第一に研究して其の釋迦宗の特色を見出してこそ、初めて釋迦を以て最尊無上の人として仰ぐとが出来るのである、是は諸君に問題として提出して置くが、佛教が佛教以外の宗旨と何れほどの差があるか、歴史上其前後を明かにせんければならぬのである、さて其上に今日日本の佛教が各宗各派に分れて色々な説を唱へて居る中に、別して禪宗と云ふものゝ特色は何處にあるかと云ふことを研究しなければならぬと思ふ、彼の村上專精師は佛教界中立派な學者であるが、禪宗と云ふものを三論宗の成り上りか何かのやうに云ふて居られるらしい、さう云ふことを云はれても打棄て置いて之を辨した人も無い様子であるが、其三論で唱へる所

の八不中道と禪宗で云ふ本來無一物と、或は天台の諸法實相華嚴の事を無碍法界などといふことと、禪宗の唱へる所と何處が違ふのであるか、そこに一つ水際を立てゝ見ることが肝要であると思ふ、其れが分らぬやうでは常に禪宗が分らぬのみならず、佛法と云ふものが曖昧糺糊たるものになるであらうと思ふ、其禪宗の專賣特許とも云ふ點を一つ見出したならば是より後に形式が何のやうに變つても言葉が變化しても、何處へ行つても、其品ならば手前の店より外はないと云ふことが云はれるが左もなければ至る所の店に同じ品物があるやうでは、一向禪宗と云ふものゝ價值もなく、隨つて佛法と云ふものが格別尊とくないものになるであらう、是等のことは宿題として諸君の前に提出して置かう。

## 五、曹洞宗の特色



天地萬物世の中に有りとは有ゆる物事に皆それ〴〵の特有なる色彩があることは今更申すまでも無い、天は必ず上より掩ひ、地は必ず下より載せる、天が上から下を載せたとは無い、地が下から上を掩ふたことは無い、天は必ず天の特別な所の色彩を持って居る、地は必ず地の特別な所の様子がある、天にある所の日月星辰皆各特色がある混雜する譯にいかない、地に羅列してある所のものも其うだ、山は必ず高い、海は必ず深い、柳は必ず緑、花は必ず紅、決して誤つたことは無い、其他萬事萬物皆特色があつて、水は必ず物を冷やし、火は必ず物を焼く、必ず間違へたとは無い、混雜したことは無い、若し水にして冷やすの特色を失ひ、火にして物を焼くの特色を失つたならば、火も火で無い、水も水で無い、天地萬物皆それ〴〵の特色があつて、各其の働きを現はして居る、學術と言ひ宗教と言ひ、皆それ〴〵の特色が無ければならぬ、更に其の根原を考へ

て見れば、互ひ人間といふ者に於ても、種々様々なる階級がある、一個人として見ても子供の時には子供の特色があり、少年時代には少年時代の特色があり、壯年に至れば壯年の特色がある、壯年時代の者が幼年の子供の様なことをして居つたならば、それは馬鹿とか阿呆とか言はれる、さればと言つて生れたばかりの赤兒が、壯年時代の有様をしたならば、是亦化け物と言はなければならぬ、それが壯年になれば壯年時代相應又異つた有様がある、老年になれば、老年時代に又異つた有様があつて、少年の考へ及ばぬ様なことが現はれてくる、僅に是れ五十年か七十年の間に於て、同じ一人の人であつても、境遇に依り時節に従て斯く異つてくる、更に願みれば均しく人間であるが、男もあれば女もある、是は身體の構造の上から全く違つて居る、女には自ら女の特色があり、男には自ら男の特色がある、幾らエライ男であつても子供を生むことは



出来ぬ、女子にどんな豪傑があつても、男のすることは矢張り出来ぬことがある。斯の如く身體構造の上からも特別なる有様がある。況んや其の精神の状態は、非常な變化を起して來るものである。子供の時には子供の時の心理状態がある、それが生長するに従て段々變化する、更に老年に至ると又變化する、其の心理状態の變化する有様を、大凡そ三ツに分けて見ることが出来る、尤も是は敢て心に限つたことでは無い、總ての物が變化して行く上に於て、三段の階級を経る様である、第一最初は皆單純である、我々も互ひ身體の上から見ても、一番最初の所でも醫者さんの生理學の講釋の様なことを此處でする必要も無ければ、出来ぬが、細胞といふものゝ上からは誠に單純なものであるらしい、それが段々と發展するに従て、第二期に至れば複雑になる、其の複雑を更に進んで行くと、又元の單純へ戻るといふことになる、我々も互ひの心

の状態でも、一番最初は、非常に單純なものである、即ち赤兒の時は複雑の考を持つて居らぬ、極めて純粹なものである、あれのこれのといふ選びを持つて居らぬ、思慮分別が全く發達して居らぬ、總て單純である、甚だ汚い言葉の様だけれども、糞も味噌も一所で赤兒の考には此れは糞だから此れは味噌だからといふ考は無い、母親や嫁母などが、迂ッかりして居ると赤兒は自分のヒリ出した糞便をもちやにして居ることもある、少しも其間に分別は無い、之を佛教の言葉で言へば、平等の有様、無差別の有様である、然るにこれが段々進んで行くと、中々複雑になつて平等では無い、糞は糞、味噌は味噌、確に差別が附いてくる一寸便所へ行つても手を洗はなければ箸は持てない様になる、嘗ては其の糞便をいぢつて遊んだ時代もあつたけれども今は其の糞便に直接手を附ける譯では無いけれども、其手を奇麗に洗はなければ心持が悪くなる、然る



に此れがモロ一つ智識が發達する第三期になつて、所謂學問知識で考へて見ると、糞と味噌との差別に疑が起るかも知れぬ、味噌といふ者は何である、豆を煮た者で、其の煮た豆を桶の中へ入れ、謂ゆる味噌樽の中で醱酵したのが味噌である、只是れ豆が樽の中で醱酵したものである、然るに其豆を我々互ひが口の中で嚼み胃袋の中で醱酵させたのが糞である、畢竟糞と味噌とに何の差別がある、味噌樽といふ物の中で醱酵したのよりは、萬物の靈長といふ人間の腹の中で醱酵した方が清潔である、况や他の腹中では無い自分の腹の中で醱酵したのであるから、是れほど自分に親しいものは無い斯う觀念して見ると、奇麗の汚ないのといふのは全く妄想である、味噌だの糞だのといふ差別に執着した考は極めて愚なる迷ひである、かう悟りが開けて見れば糞も味噌も一緒に平等に見ることが出来る、斯様に我等の思想は三段に歸する、赤子

の時にはどの様な汚ない襦袢であつても親が着せて呉れれば其儘着て居る、どの様な綾羅錦繡と雖も襦袢と雖も選ぶところが無い、誠に單純な者である、これが少し生長して小學校へても行く様になると餘所の子はこんな衣服を着て居るから私もあんな衣服を着たいなど、云ふ、私も多くの子供を育てたが其子供等の心理状態が發達して行く有様が明に見える、之が段々生長するに従て益々複雑になる、こんな外套が流行る、こんな帽子が流行ると言つて中々複雑になる、それがモウ一の進んで來て、所謂第三期になると、元の單純に戻つてくる、弊れたる襦袢を着て狐貉を着る者と立て耻ぢざるは其れ由か、と孔子が言はれたことがある、由といふは、御承知の如く孔子の十哲の中の子路の名である、子路といふ人は、非常な勇氣の鋭い人であつた、同じ十哲の中でも子貢といふ人は大層伶俐な人で、才子肌の人である、中々複雑な考を持た



人らしい、已に言語には幸我子貢と言はれて、幸我と子貢とは非常に言語に優れたる人で辯舌も爽かてあつたらしい、然るに子路といふ人は、それとは違つて甚だ訥辯であつた、其代り酒落れといふ様なことは些ともせぬ、弊れたる襦袢ボロ／＼した乞食の着る様な物を着て狐貉を着たる者、其時代の人は、狐の皮衣といふ者を非常に尊んだ、今日の普通の言葉で言つたら綾羅錦繡と言つても宜い、さういふ立派な狐貉を着たる者と並び立て耻ぢざる者は其れ由か、是に至つては襤褸も無ければ錦繡も無い、平等一味の單純なる所の第三期に入つたのである、斯の如く我々も互ひの心理状態は三段の經歷を経て居る、其第一段の一番最初の單純なるものは全くの無學な人物の差別の分らぬ様な者、さういふ者の集つた社會を野蠻と言ふ、秩序も無ければ規則も無い、直情徑行思ふた儘にして居る、野蠻な有様であるけれども全く單純平等で

ある、これが第二期に入れば複雑になつてくる複雑になつてくるに依つてそれを統一する整理する爲に政治法律等の種々な道具も出来てくる、其の複雑極つた有様を世の中で文明と言ふのである、文明といふものは複雑なものである、然るに此の複雑なものが、人を煩悶に陥いらしめる、世の中の事はどうも自分の思ふ様にばかりにいかぬことがある、己れ一人で直情徑行で單純にやる様な譯にはいかない、さうなると此處で又單純を求むることになる、世の中の有様を見渡し社會の有様を見渡すと、貧乏人の衣食住は誠に單純なものである、豚小屋の如き處に住んで居つて寒ささへ凌げればどんな衣服でも宜い、冠り物はどんな物でも宜い、然るにこれが段々と富貴になると、衣食住の様子が非常に複雑になつて、さうして其の複雑極つた所の富貴榮華の人達は家屋の上から見ても、其の門構から玄關から、應接所、廊下を経て座敷の工合、奥



の住居の様子、中々立派な座敷、立派な生活をして居る人達、此の人達が複雑に飽きてしまつて、只飽きる位では無く、五月蠅くて堪らぬ、そこで外に別荘を造り、静閑なる所に逃込んで行くといふ者もある、又奥庭といふ様な處、誠に複雑なる泉水築山、種々なる樹木、種々なる石燈籠、大層立派な仕掛けてある、何ほど金が掛つて居るか分らぬ様な仕掛けてあるそれを通り抜けて、築山の蔭の方に行つて見ると誠に些やかなる所の竹の柱に藁の屋根、こちらの御殿の方は、天井が高く立派な粧飾がしてあるかと思へば、築山の蔭の些やかなる竹の柱に藁の屋根は、四疊半の狭い所で、其處へ這入るには腰を屈めて這入らぬと頭を打附ける様な其の狭い所で、爐が切つてある、自在鍵が釣してある、文福茶釜みた様なもので湯を煮て居る、表座敷の方は、ピアノだ、オルガンだ、バイオリンだ、中々に騒々しい有様かと思ふと、こちらの方では釜の湯の煮え音を

聞いて、物靜かにして、啞か聲の様な顔をして居る、持出して來た所の道具は何處かの芥捨場などで拾つて來たかと思ふ様な小汚ない缺け茶碗に、竹のさゝらの様な物を持出して來て、何か青い粉を搔廻してそれを呑んで居る、逆も西洋料理の御馳走の様なものでは無い、是が富貴榮華の極點に達したる者の樂みだ、慰みだ、斯の如く單純より複雑、複雑より單純に返るものだ、最初の内は前申した如く無學文盲野蠻の境遇、第二期の複雑に進んだ所が所謂文明、今日世の中に言ふ所の學問と唱へるもの、科學とか哲學とかいふ者は何を研究して居るかと言へば、其の複雑なる所の有様を研究して居る、又汚ない話に戻るが、糞と味噌の差別を研究して居る、味噌といふものは斯ういふ性質のもの、斯ういふ造り方である、糞といふものは斯ういふ性質のもの、斯ういふ成立のもの、其原素はどうであつて其効果は何處にあるといふ様なことを研究す



る之を名づけて化學と言ふ、理科だの法科だの、工科だのといふものは其の糞の始末方を研究して居る、其味噌の取扱方を研究してをる、斯ういふ風に取扱へば、其糞が肥料になる、それに付て斯の如き規則がある之に背かぬ様にしなければならぬといふ、之を名づけて學問といひ法律といふ、今日の世の中は所謂文明といふ複雑極つた世の中だ、其の複雑なる有様も近頃は餘程退屈した様な有様だ、是に於て單純な處に戻りたがる、即ち金殿玉樓のお座敷を通りぬけて茶の湯座敷に入りたがる、一方に於ては、宗教を喜び、一方に於ては道學を喜ぶ、近頃禪學などが流行つて居るが、矢張り複雑に飽きて單純に入りたがるのである、けれども世の中の總ての有様といふものは、此の複雑を名づけて文明と言ひ、普通の世の中の有様は、單純より複雑に入る者である、更に單純に戻るといふことは世間普通には無いことである、そこで宗教とか道學と

かいふものが、或る一部分に於て尊ばるゝ所以である。

世界萬國に、種々なる宗教があるけれども、何れの宗教と雖も、複雑なる世を避け、單純なる平等一味の所へ行かうといふより、外に、宗教の目的は無さそうである、其宗教に依て名の付け方や形式が種々違ひはあらうけれども、要する所は千差萬別の物を一味平等の所へ結歸させやうといふの外は無いのであるから、或は天と言ひ、或は神と言ひ、或は佛と言ひ、それ〴〵皆一味平等の中に入れられるのである、我々お互ひ凡夫の姿を見れば、實に千差萬別である、それが一味平等なる所の天なり神なり、或は佛なりに投合することが出来た時を名づけて神佛に歸依したといふことになる、名と形は色々變るが大體は同じである、然るに其目的は皆同じである様であつて、其の中に又程度がある、淺いもあれば深いもある、廣いもあれば狭いもある、低いもあれば高いもある、從て



各々の宗教に皆其れ／＼の特色がある、浅いものは、浅いといふ上に付て特色があり、深いものには深いといふ上に付て特色がある、水の流を見てさうだ、碧潭澄んで皎潔といふものも水の特色であるけれども、疎影横斜水清淺といふのも水の特色である、水は必ず碧潭澄んで皎潔といふばかりが水の色では無い、疎影横斜水清淺といふ様な有様にも亦言ふに言はれない味がある、即ち高き者は高きが儘に、低きものは低きがまゝに各特色がある、世の中に色々の宗教がある、其宗教の浅深高低は、今置いて問はぬ、ブラマ教にはブラマ教の特色があり、猶太教には猶太教の特色がある、それを今一々研究して居る暇が無い、其の猶太教が更に耶蘇教となり其の耶蘇教の中に舊教と新教とがあり、其舊教の間に於ても、ローマンカトリックは、ローマンカトリックの特色があり、ギリシヤカトリックは、ギリシヤカトリックの特色がある、ローマンカ

トリックに於ては、キリストと名づけられてギリシヤカトリックに於ては、ハリストといふが如く名目も違ひ、従て形式も違ふ、又近頃獨逸邊て行はるゝ所の自由派の耶蘇教の如きも、名目も違へば形式も違ふ、我が日本にもユニテリアンといふ様なものが段々行はれて来たが、彼等の見る所の神は殆ど我が佛教の法身佛に近づいて来て居る、斯の如く皆同じイエス系統の宗派の上に於ても各々其特色がある、況や固より其の成立を異にして居る所の回々教の如き、マホメットといふ人が初めて回々教を創立する時の考は耶蘇とは全く違つて居るらしいのであるから、其形式も違ひ名目も無論違ふ、又亞米利加あたりには、モルモン宗といふものがあるさうだ、是等のものに至ると又別して特色がある、諸君も御承知の如く、モルモン宗は一夫多妻主義である、之がモルモン宗の特色である、斯の如く各宗各派各皆特色があるとしたならば、我



が佛教はそれ等のものとどう違ふ所の特色があるぞ、これが能く研究せられて其の解決を得て居らなければ、我々は佛教を以て大層な無上の教の如く言ふのも全くの妄想となる、其事は即ち先年釋尊降誕會の際に、釋尊の特見といふ題の下に其の一部分をお話したのである、約めて言ふて見れば佛教の中には我が釋迦如來が世間の言葉で言つたならば、專賣特許を取る所、或は出版の事業に於て著作権を取るが如き所は何處にある、此處が釋迦如來の著作権を取といふ所が何處かに無ければならぬ、即ち佛教の特色は何處にあるか、是に於て先年は聊か釋尊の特見といふことを、二つか三つか舉げて一部分のお話をしたと思ふ、更に今日は其の釋迦如來の特見の下に於て佛教の各宗各派の特色に付て申して見ると、各宗各派には皆特色がある、所謂單純なものもあれば複雑なるものもある、更に複雑を經過して單純に戻つたものもある、

其中に就ても古から四箇の大乗と唱へられるものは、華嚴宗、天台宗、禪宗、眞言宗、此の華天禪密の四箇の大乗といふものは、殆ど同じ程度であると斯う世の中から看做されて居る、華嚴といふ者は果して何が特色であるか、華嚴の特色とする所は事々無礙法界、これが華嚴の特色である、又天台宗は大體の上に於ては、五時を立て八教を立て、居る、其八教の中に於て、藏教と云ひ通教と云ひ別教といふのは、天台宗の特色では無い、天台宗の特色は、圓教に在る、又同じ様などを他の諸宗に於て言ふとして、愈々著作権を取るといふ時になつたならば、天台宗の圓教は全く他宗と違ふ所がある、眞言宗といふ宗旨は、今日午後に權田僧正が眞言宗と曹洞宗との關係に付てお話があるといふとてあるから、必ずそれ等のことも發揮せられるであらうと思ふが、眞言宗は弘法大師が支那から持て來られたので、印度から支那に渡つた宗旨であるが、支那は



殆と通り抜けに日本に於て發達した宗旨である、其の宗旨は、十住心論といふものが、眞言宗の專賣特許である、即事而眞當相即道といふのが眞言宗の專賣特許である、言葉は違ふけれども、前の三段の思想の發展する順序で申せば、複雑が更に單純に至り差別に執着して居つたものが、一味平等の姿に入つてもふた、此處までの有様といふものは、三宗共に皆殆と同じ程度に進んで居る、其の華天禪密の中の禪は、本宗も其禪の一派といふものであるが、其の禪といふものには、果して如何なる特色があるぞ、

禪宗の歴史は固より諸君研究して居られるであらう、達磨大師が支那に於て、不立文字教外別傳指人心見性成佛といふことを標榜せられたといふ、其の歴史的の事實は兎に角に、世の謂ゆる禪宗といふものは、そんな様なものかも知れぬ、しかし私は今日の禪宗といふものは達磨

大師などの能く御存知ないことでは無いかと思ふ、三祖大師の信心銘といふものなどは、誠に穩健なものであるけれども、今の世の所謂禪宗といふものとは殆と違つて居るかと思ふ、要する所今日の禪宗といふものは何を以て特色とするのであるか、今いふた達磨大師や三祖大師のいふた所に比べて見たならば、所謂禪宗の特色とする所は所謂曹溪大師にあると思ふ、今日の禪宗と稱して居る者は達磨宗では無い、三祖の宗旨でも無い、誰の宗旨かといへば即ち曹溪六祖の宗旨である、其事は今更申すまでも無い、我が承陽大師の如きは正法眼藏に達磨大師を其れほどに標榜されたことは無い、三祖大師を格別に鼓吹したことも無い、曹溪の高祖といふことは屢々いはれた、即ち曹溪が本となる、禪宗は達磨大師より、二祖三祖四祖五祖を経て、茲に二大特色に分れた、一方は曹溪と分れ、一方は神秀と分れた、北宗には北宗の特色があり、南宗に



は南宗の特色がある、曹溪門下の人は北宗を輕蔑する傾きがあるが、一方から考へて見れば神秀上座、即ち北宗の祖師是は容易に輕蔑す可きもので無い、況や又其當時の唐朝時代には北宗の禪宗が盛に行はれたことは大層であつたが、六祖は引込んで居つて餘り世に出て運動せぬ人であつた、神秀上座の方は朝廷の御歸依も非常に厚かつたのである、曹溪宗などの及びも附かぬ譯であつたけれども曹溪の道は追々に益々盛になつた、どうして盛んになつたかといへば一方には黃檗臨濟の如き人が出來、一方には、天皇道悟、藥山、洞山の如き人が出て、是に於て曹溪の宗旨が盛になつて、これが段々傳はつて來て更に宋朝に至て臨濟下に圓悟が出、大慧が出、曹洞下には芙蓉道楷が出、其下に宏智正覺が出た、是に於て各々特色が違つて來た、即ち宏智の道と、大慧の唱ふる所と互に長所を以て争ふたのである、大慧禪師は宏智禪師を罵つて默照の

邪禪といふ、然るに宏智禪師門下の人は、大慧禪師の禪を看話禪と罵つて居る、其流が今日まで遺傳し來て居るから、臨濟の方では、圓悟大慧を標榜し、碧巖を標準として所謂看話禪を鼓吹して居る、我が高祖は宏智の法系では無い、法系ではないけれども宏智を基礎となされた道が高祖に傳はつたから、高祖のお宗旨は全く宏智宗と言つても宜い、正法眼藏九十五卷は全く宏智の道をお傳へになつて居ると思ふ、是が我が曹洞宗の特色であらうかと思ふ、圓悟大慧を標準としたる所の濟家の特色と比較して、今日の我が曹洞宗に特色が有るか無いかといふことが問題である、今日曹洞宗の人達一萬四千箇寺、それに相當したる所の僧侶、或は師家となり或は所化となつて居る所の人達が、學問であるとか修行であるとかいふことをして居るが、其の學問や修行に曹洞宗の特色があるか無いか、其特色が無ければ、曹洞宗は獨立して存在する必要



を認めないことにならうと思ふ、有つても無くても宜い猫の尻尾の様なものである。然るに曹洞宗の人が我が宗、我が宗といつて何か或るものがある様に思つて居るやうであるが、若し其實謂ゆる特色が無つたならば、自ら欺き人を欺くといふものである。自ら欺き人を欺くのが曹洞宗の特色ではあるまい、さうすれば今日曹洞宗の現在の有様はどんな有様か、斯ういふ問題になつて來ます。

之を細かに言へば限が無い、そこで今は形式と精神と二つに分けて見る、乃ち形に現はれた曹洞宗は如何なるものであらう、高祖が七百年前に支那から御歸朝の際、支那の形式の儘持つて出になつた、だから日本に於ての曹洞宗の特色といふものは何も無い、支那の曹洞宗其儘で規則儀式の上に於て少しも日本に於て新たに發展した所が無い、支那の儘であつて日本的になつて居らぬ、今日まで其儘で永平寺の本尊を

見ても釋迦と彌勒と阿彌陀と三體の佛像で、どれが本尊でも無ければ、どれが脇士でも無い、更に一方を見れば、護法神といふ者が祭られてゐる、護法神といふものは何かと言へば、支那の土地神である、日本て言へば、其土地の産土神である、武藏國の産土神は氷川明神だ、氷川明神に護法を囑託すといへばそれである、何も支那の土地神を頼んで置く必要は無い、さて又其の祭りをするにしても、日本には日本の神の祭り様がある、祭る儀式もある、然るに支那の神を祭るのであるから支那の儀式を以て紙錢を焼いたり土の團子を上げたりするやうな滑稽なこととする、一方には達磨を祭つて居る、日本の曹洞宗の祖師で無いものを祭りて居る、支那に於ては達磨が高祖であらうけれども日本の曹洞宗の高祖は承陽大師である、然るに承陽大師の木像を末寺の開山堂の居候にして置くとは何事である、さうして祖師堂には、日本の高



祖でもない、遠磨を置く、最初から此の形式が誤つて居る、又曹洞宗の法衣はどうであらう、紫緋黄の三色は禁色だ、禁色とは他の者が着ることがならぬ、法衣だ、紫衣は申すまでも無く、特別の勅許を得なければならぬ、緋の法衣は、諸宗に通じては僧綱以上の制服である、紫衣といふのは僧正になつて緋の法衣を着る様になつて特別の勅許を得なければ、着られぬのである、昔は栗田の青蓮院門跡に於て、紫衣勅許の免狀を出したものだ、然るに永平寺の如きは其の紫衣を着用することは寺の資格として、特別の勅許を経ずに着るのである、然るに本願寺の如き寺に於ては、住職が僧正なれば緋は着るが、紫衣はまだ着られぬ、栗田の青蓮院の勅許を経て初めて紫衣を着ることが出来るのである、斯の如く紫衣緋衣といふ様なものは、身分に依て非常にやかましいものであつた、それ等は即ち日本に於ての規則である、けれども其法衣の造り方はどう

である、天台宗や真宗あたりの法衣といふものに、袍服といふものがあり、鈍色どんじきといふものもある、直綴といふものもある、或は素絹或は道服など唱へるものもある、これ等の中の多くは支那の服制其儘では無い、日本的の服である、其中に直綴と唱へるものだけは支那の着物で、日本の着物では無い、然るに曹洞宗に於ては支那の着物を其儘に着て居る、前に言ふた寺の建て方、佛像の配置の仕方、皆支那の儘で、日本的に翻譯せられて無いのである、今日は全く形式が段々破れて來て居るけれども、其の破れざる昔の所を見たならば、日本曹洞宗の特色といふものは無くて支那曹洞宗の其儘であつたのである、

それから精神の方はどうかといふと、曹洞宗の精神は、前申した通り、宏智禪師の精神其儘が、我が曹洞宗に傳來した、其精神を發揮する上に於て形式が種々に變化して行くのである、同じ支那に於ても曹溪六祖頃



の形式と、更に下つて承陽大師頃に至るまでの間には、唐朝には唐朝の形式があり、宋朝には宋朝の形式がある、承陽大師がも出になつたのは宋朝の末、元朝に移る時代でありますから、唐朝時代とは餘程變つて居ります、御承知の如く支那は其の時代に依て同じ文字を讀む音までが違つて、唐朝には唐音があり、宋朝には宋音がある、況んや形の上に於ても、伽藍の建築の仕方でも袈裟の仕立て方でも違ふのである、日本今日現在の宗旨で、天台宗、真言宗、真宗といふ宗旨は、袈裟の仕立方が違ふ、真言宗、天台宗、真宗の袈裟には環が無い、環は無くして紐で結ぶ、紐で結ぶといふ點は、今の曹洞宗の人がやるのと同じであるけれども、曹洞宗に横被といふものが無い、修多羅といふものも無い、横被といふものは、理屈から言へば男僧の掛けるもので無い、尼僧の掛けるものだ、と云ふ説があるが、説は兎に角横被といふものを天台や真言では掛ける、之を掛け

る時には、多くは錦や金襴で造つたもので之を袈裟と言つて居る、無地の綸子や緞子で造つたのは平袈裟といふ、斯ういふ制度のあるのは唐朝の風俗だ、伽藍の建て方でも、京都の東寺、或は比叡山などは、みな唐朝の制である、中堂とか、金堂とかいふものがあちらの山にあり、こちらの山にある、其の間に聯絡が附いて居ぬ、順序を正しく其の間へ廻廊を以て繋いであるといふ様な者は、比叡山にも無ければ高野山にも無い、然るに宋朝になると其の様子が違ひ、袈裟に環を附けるといふことが行はれたらしい、そこで我が日本に傳はつて居るものでも、宋朝以後の形式を學んだものは、淨土宗でも日蓮宗でも皆袈裟に環が附いて居る、後の所に一寸した小さい總が附いて居る、さうして座具といふものは、日蓮宗には全く無い、淨土宗では座具を持つけれども、廣げない、臨濟宗と曹洞宗は其の座具を廣げて、禮拜する時に必ず用ゐる、斯の如く、座具



の使ひ方には違ひがあるけれども、袈裟の制度は、臨濟宗、曹洞宗、日蓮宗、淨土宗、全く同じであつた、全く宋朝時代の制度であると思ふ、斯の如く支那に於ても時代に依て形式が違つて居る、形式は違ふが、精神は同じ精神だ、同じ精神を發展せしむる方法として、其の時代に適當な形式があるのである、然るに我が日本の曹洞宗の有様は、只時代が違つたばかりで無い、支那と日本と國まで違つたに拘らず、宋朝時代の支那の形式を今日まで其の儘持て來たのであるから、今日の時代に適當す可きは、今は無いといふことを私は斷言することが出来ると思ふ、然るに今日の曹洞宗の現況は、其の従前の形式と大に變つて儀式も作法も全く昔とは違つたことになつた點が甚だ多い、是れが若し今日の時代に適當した護法扶宗の方便として改良されたのであるならば、誠に喜ばしい次第であるが、其の精神は如何であらうぞ、其の精神は三千年の昔、釋尊

の時代から今日に至るまで、佛法の精神に違ひがあつてはならぬ、其の不變の精神を發揮する爲めに形式に變更のあるのは誠に喜ばしいけれども、若しも其れと反對に形式が違つてくる爲めに、精神が違つてくるのであつたならば、實に大變であると思ふ、諸君が此の場合、此の形式を取らなければならぬといふのが、決して動かすことの出來ぬ精神を發揮する方法として變つたのならば、誠に尊いのである、然るに形式が變つた爲めに精神が變つてしまつては、それは變つたとは言はれぬ、亂れたと言はなければならぬ、今此の場合に於て法を説かうといふには、法衣を着て袈裟を掛けて珠數を掛けて居つては、どうも不適當である、此際に於ては洋服が宜い、或は羽織袴の方が喜んで法を聽くといふので、形を變へたのは、墮落したのでは無い、亂れたのでは無い、已むを得ず適當の手段を取つたのであると思ふ、然るに彼の人は法衣を着け袈裟



を着て、抹香臭い坊主と言はれるのがイヤだから、成るだけ坊主と見られ度くない爲に、洋服を着て袴羽織を付けるのは、墮落したのである。方便の爲に形を變へたのではない、是に於て精神上の場合と形式上の場合と分けて考て見なければならぬ。若し堅固なる精神を發揮する爲に必要已むを得ず形式を變へたといふならば、實に今日は是までの形式を改めなければならぬ。時機に迫つて居ると思ふ、さういふ點から形式を變へるといふならば、確な方法手段を以て、所謂亂れたる者、墮落したものと混雜せぬ様に此形式を變へて行かなければならぬ。然るにさういふ方面に向つて、今日曹洞宗の形式が果して如何なる改革が行はれて居るかと言へば、些つとも行はれては居らぬ、行はれて居りませぬから妙なことになるので、或る點に於て曹洞宗の宗義を聞いて見ると、誠に感服して有難いと思ふ、然るに其人が實地に、従前の形式上行つて居

る所を見ると、誠に感服の出来ないことが多い、ホンの只抜け殻の様なる形式が、或る部分に残つて居て、精神は抜けてしまつたのである。形式が變ると同時に精神が何處かに全く無くなつてしまつて居ることも亦多いのである、其れはとにかく我が曹洞宗の特色は如何といふに前に申した所の三段の階級を経て、單純なものが複雑になり、複雑なものが更に單純に戻つて、所謂第三期であるが、其の第三期は、複雑より進んだ所の單純であるから、所謂差別が平等一味に進んだので、此の平等一味に進んだる有様が、佛教の所謂大乘教の姿である、それが色々に色別けが違ひ、言葉の立て様が變つて、天台宗とか、華嚴宗とかいふ宗旨が成立つて居るのである、兎に角みんな此處に腰を掛けて居る、平等一味になつた所に皆腰を掛けて居る、然るに我が高祖の流義は、モウ一步進んで第四期に入つて居る、それはどうかと言へば、第三期の一味平等と進



んだものが、更に戻つて複雑に還つて居る、百尺竿頭さらに一步を進めるのである、此の百尺竿頭一步を進めるといふことを、私の解釋は人の言ふのと少し違ふかも知らぬが、百尺竿頭更に一步を進めるといふのは、向ふへ進めるのでは無い、是に於て一步を退くといふのが百尺竿頭更に一步を進めるのである、躡つて元の位地へ戻る、元の複雑の地位に戻つてくる、其の有様はどんなであるか、三年有一閏、雞向五更鳴と仰せられたのが、高祖が最初興聖寺の開堂に於て提示せられたのである、我々の精神觀念が形に現はれ、言葉に現はれてくるのであるから、食事に向ふ場合にも便處へ行く折にも思はず知らず口にも現はれ身にも行はれるのである、其の現はれて來たものが、即ち威儀作法となるのである、其の威儀作法に定りがあつて一つの形式が出来て來たのである、二時の粥飯にも維那がカチリと槌を鳴らす、之を聞くと同時に、佛生迦毘

羅、成道摩迦陀、說法波羅那、入滅拘釋羅と聞槌の四句の偈を觀念する、然るに諸君は失禮ながら、其槌を聞いた度毎にいつても佛生迦毘羅云々の觀念を起すかどうか、飯臺座の時にだけカチリといふ音がすれば佛生迦毘羅といふけれども、只形式的に言ふので、精神が無いから、合掌一つしない、丸て兵隊が物を食うと同じ有様だ、兵隊には却つて兵隊相應の行儀があるが、鐵道工夫などが飯を食ふと同じ有様だ、全く精神の抜けた形式で、誠に詰らぬものである、誠に私は残念に思ふ、仍て自分は自分だけに極めて單純に、女にしても子供にしても、三つても權助でも行はれるだけの所を自宅で行つて居ります、我々の在家に於ては佛生迦毘羅から始めとして悉く唱へる必要はありません、必要だけれども餘り長いと説明も俄に出來ぬから、其意味を得心させることも六ヶしい、之を行ふことが煩はしくなる、極めて單純にして只二偈だけに止めて



ある、私のやるは食事に對した時は、朝でも晩でもいつてもやりませぬ、私は必ず合掌する、或は其の場所に依ては、時として物々しく人の見聞を煩はす場合もあるから、さういふ場合には形に現はして合掌させぬても、心の中に合掌し口の中で偈文を唱へて居る、誠に單純にして其意は盡して居る、一分間も掛らぬのであるから、私の家の子供等は皆毎日實行して居ります、所が堂々たるお出家様方が、形式的飯臺に向つた時の外は手も合せない、只形式に流れて何の意味とも分らないのである、或る寺で晚課の諷經に甘露門を讀て居る、私も參詣したが、只甘露門を讀むばかりで些つとも施餓鬼の作法が無い、水一滴米一粒も上げて無い、さうして言ひ草は何かと言へば、是諸衆等發心して、一器の淨食を奉持して云々と、此れは一體何を言ふて居るのである、友達同士であつても人を欺くといふことは無禮至極である、サア馳走を持って來たから召

上れと、只口ばかりで、何も持て來ないでサア召しあがれといふのは些と殘酷ではないかと思ふ、其の寺は認可僧堂の格地であつた、其の和尚は懇意な和尚でありますから、私は忠告した、其人は誠に眞面目な誠に道心の堅固な人であるから、私が忠告したら、それは氣が附かなかつた、誠に心得違ひをしたと言つて顔色を變へて甚く後悔した、更にやり直しますと申したので、私は其時言つた、施餓鬼には多くの御馳走は入らぬ、洗米七八粒あつたら宜しい、僅に二三滴の水を注いだら其れだけ宜い、そこで和尚驚いて自分一人て施餓鬼をやり直した、私は大いに感服したのである、是程志の厚い人が矢張り抜け殻の形式に陥つて居るのは一つは無學の然らしむる所である、斯ういふ様なことが多いのである、そんなことを並べて居ては限りがないが、要するに我々がする事、爲す事が皆佛法に向向せられる觀念を以てそれが或る場合には言葉



にも現はれるのであるから、其の精神を徹底せしむるが爲には、従前複  
 雑なる所の形式も或は簡略にしなければならぬこともありませう、去  
 ながら、形式を變じたが爲に精神が抜けてしまつては、誠に悲しむ可き  
 ことであります、それでは本宗の特色を失ふてしまふのであります、本  
 宗の特色は不變不妄の精神を千變萬化の形式に現はすのであります、  
 そくて作法即宗旨威儀即佛法となる、此れが本宗の特色であつて、他宗  
 他門の理屈に滯ふりて獨り高く留まつて居るのは宗意でないと思ふ、  
 其れに就ては其の作法威儀といふことに就て將來益々本宗の特色を  
 現はして戴きたいと思ふのであるが、今は只諸君の前に此の問題を提  
 出して、外教に對して佛教の特色如何といふことを研究し、其佛教の上  
 に於て各宗各派の中に、我が曹洞宗の特色といふことを研究して、其特  
 色を發揮するが爲には、従前の形式に執着して居る必要は無いといふ

ことは、私も固より認めるのでありますけれども、根本の精神を忘れて  
 形式ばかり變つて行くといふのは、改革したといふので無く、變更した  
 といふのでも無く、墮落したのである、紊亂したのである、さういふこと  
 の無い様にしたといふことを希望するのであります。

### 六、青年參禪の可否 (某雜誌の問に答ふ)

參禪は本より老少を問ふべきに之なく候へば、宿福深厚の者に在ては  
 幼少にして尙能く徹底するも之あるべく候へども、此の事元來大丈夫  
 の學にして、人生最極の大事に候へば、血氣未だ定まらざる者の如き、能  
 く其の道を得るは極めて稀有の事と存じ候、况んや方今の青年輩一種  
 流行の煩悶とやら申す妄想病に罹り候者、轉地療養海水浴と同格に、禪  
 學にても相試み候はゞ如何これあるべくやなど申しふらし、一二の禪



書など見ちらかし候て、佛祖の公案を謎の如くに心得、妄識の轉變を悟道の如くに思ふものを參禪と稱するが如きに至つては、管其の人に益なきのみならず、斯道のために甚だ歎はしき次第と存候、要する所は參禪を一時應急手當の醫藥の如く心得る者の今の世に多きは甚だ遺憾の事に候、冀くは參禪は唯是れ安樂の法門なり、菩提を究盡するの修證なりと心得て、健全なる人に於ける日々三度の食事の如く、生涯缺くべからざる平穩無事の活計を致させたまものと存候、故に「青年參禪の可否」と云ふ問題に對しては、其の人次第にて可とも否ともなるべしと申すの外なく、若し之を更に「方今青年間に流行する參禪の可否」としての問題に候はゞ、小生は躊躇なく「否」と答ふるの外これなく候。

## 七、忘機

忘機と云ふ言葉は讀んで字の如くだが、機はつりの字は字の如くと云ても色々とと解釋の出来る字であるから別して選みを付けて置かなければならぬ、茲に謂ふ所の機は機關はつりの機であつて機關といへば種々なる複雑な仕掛を以て一種の働きを起させる所はつりのからくりである、其機關の機はつりの字が世の謂ゆる種々なる工藝其の他に使ふ器械、其の器械の有様を吾々の心の働きの上に譬た時に心機と云ふ字が出て來る、即ち心の機關——吾々互に憎い可愛い惜い欲いと働く心、其の種々なる心に働きを起すそれが即ち心機である、其機を忘する——禪宗などの人達が機を忘すると云ふ——心の働きを忘れるのである、忘れると云ふはどう云ふことであるか、云ふまでもなく最初から無いならば無いのであるが、吾々互の心の働き——憎い可愛い惜い欲いと感ずる、或は悲いとか嬉しいとか、それが最初から無いと云ふ譯には往かぬ、有るに違ひな



い、其有るものが有るばかりでなく、一時餘程發達しなければならぬ、餘程ぐらひでない極點まで心機を發達させなければならぬ、其發達し盡した上に、それを更に一步超脱するのである、所謂百尺竿頭一步を進むると云ふ意味であるが、實は餘程解釋の仕難い事である、之を事實に現はさうと云ふならば大層危険の事である、一尺二尺と終に百尺の長さの竿の頭へ段々と歩みを進める、進み切つて是より一步を進むる所が無いと云ふ竿の頭に立つた、もう一步進むといふことになれば、向ふへ落るより外に仕方が無い、其落ちるといふ意味は、どんな所へ落ちるのてあらう、行詰つてしまつてもう行き場が無くなつた時、更に一步を進むれば華嚴の瀑へても飛込むより外に仕方が無いことになる、然し百尺竿頭更に一步を進むると云ふは決してそんな事ではない、尤も境遇が變つて來ると云ふことだけで見たならば、瀑へ飛込んでも差支ない

が、此の百尺竿頭更に一步を進むると云ふは、吾々の心の働きが極點まで進み行つた時にどうするか、それをガラリと忘れてしまふのである、それが即ち百尺竿頭さらに一步を進めたのである、所謂機を忘すると云ふことが最も大切である、此機を忘れてしまふた上から現はれた機を名付けて何と云ふ、之を活機と云ふ——活きた働きてある、それまでの働きはナゼ活きた働いてないか——活機でないかと云へば、エマルンは傳説文飾に依て教へられたる、神を驅逐しないで、それに付き廻つて居る間は神と我と別々になつて居る、神と我と別々になつて居るのでは一致することが出來ぬと云ふたさうであるが、達磨大師は其れを教外別傳不文字と云ふたのである、それまで進み切つた時にどうなるか、神といふことも忘れ、我といふことも忘れ、神の外に我は無い、我の外に神は無い、神と我と一致して何とも彼とも言はれぬ場合に至つて初



て眞實に一致し得たのであつて、茲に於て其靈妙なる殆んど名狀すべからずと云ふ、謂ゆる不思議即ち考へることも出来ず言ふことも出来ぬと云ふ場合に至るのである、茲に到ることを段々稽古して往かなければならぬ、其稽古をすることを或は修養と云ひ、或は信仰と云ふのであらう、名は色々違ふけれども結局は其處に到る爲に釋迦も、孔子も、古から聖人とか君子とか言はれる教を立て、呉れた人々は、皆其方法手段を教へられたものである、是は單にさう云ふ高尚な話ばかりではなく總ての事が皆機を忘するに到らなければならぬ、其靈妙名狀すべからざる眞個の仕事は出来ぬ、吾々も互最初匍ふやうになり立つやうになつた時に歩くことを稽古する、其歩くことを稽古する時にはなか／＼ひつかしい、機を忘する所の沙汰ではなく其機がまだ發しない、歩くことは何うして歩くやら歩く機といふものが本當に起つて居らない、最

初に於ては其機を起させる爲に非常に心配する、語を換へて言へば十分に意識を用ゐなければ歩くことが出来ぬ、今度は右の足、今度は左の足と阿母さんが教へて稽古させる、あんよは上手、ころぶはお下手と囁しながら歩く機を稽古させる、それを積んで來ると機を忘れて了はなければならぬ、今度は右今度は左——そんな事で徒歩競走など出来るものではない、其時は無意識に何か知らんが歩くこと、自分の足の働が一致して其靈妙なる名狀すべからざるに至るのである、茲に至つて初て眞に歩くことが出来る、他の事考へても同じである、吾々は左の手にお椀を持ち右の手に箸を持って御飯を戴く、最初はなか／＼其機がひつかしい、箸の持具合指一本の置具合で箸が自由に動かぬ、左利きの子供は左手に箸を持つ、右に持つのであると母親がやかましく言つて右に持たせると御飯を外へかき出すやうな事をする、其間の稽古し修



行するには十分意識を用ゐなければならぬ、けれども若し其儘で壯年に至り更に白髪の爺さんになつても箸はどつちへ持つか、此指はどつちへ出てはいかぬ、茶碗はどう持つかと云ふやうでは、それは全く無神經で機の無い奴である、それは到底自由自在に御飯を食ふことが出来ぬ、然るに何時の間にか機を忘れてしまふ時は、どちらに箸を持つか茶碗を持つか、膳に向へば茶碗と箸と食物と一致して其靈妙なる名狀すべからざるに至るのである、さうなつて吾々は自由に御飯を食へることが出来るのである、筆を把つて物を書くのも最初いろはの手習をする時には筆と自分の手と文字と紙と一致しない、ばら／＼である、悉く獨立して居る、それを段々稽古して筆と手と一致したと思へば墨と筆が一致しない、筆と手と墨と一致しても紙との一致が未だ出来ない、ヤット紙とも一致することゝなつたとしても、未だお手本と一所に

なれない、手本はもう少し上つて居る、こつちが少し開いて居る、もう少し引張つてあると一々手本を見て書く、いくらやつてもうまく往かぬ、それではまた一致したのでない、それが後々には何を書いてても手本と些も異らぬやうになつた時に、今度は手本にくつ付いて居るといふ病がある、謂ゆる傳説文飾に依て教へられたる癖が残つて居る、其手本を離れることが出来ぬから、葉書を書いて呉れと言はれても、此葉書の手本はを習はなかつたと云ふことになつて、手本が無ければ葉書が書けぬ、それが自由自在に如何なる物でも大きい字でも小さい字でも勝手自在に書けると云ふは機を忘れた上てなければならぬ、機を忘れてしまつた時はどうである、是は誰の手本である、顔真卿か文徵明か、何か知らぬが自分の字であると云ふものが出来た時が全く機を忘れてしまつた時である、劍術なども然うださうて、自分に何か一物あつて斯う



しやうとかあししやうとか云ふ心機のある間は自由に往かぬものださうである。先年逝去せられた勝海舟翁、あの人に初めて逢つた時、今より三十四五年ばかりも前の事であるが、其時の話にあの人が劍術の稽古をする爲に、名は忘れたが幕府の御師範役某の許へ内弟子となつて行つて居られたさうである。其先生が猿を一疋飼つて居られたが非常に怜悯の猿であつて、其先生から劍術を教へて貰つて餘程達者に竹刀を持つて立合ふのださうである。そこで新たに弟子入に來た武士でも有ると先づ其猿と立合はせる。如何にも残念至極なことで堂々たる人間が猿のお相手にならなければならぬ、忌々しいが中々其猿を打つことが出来ぬ、先生は此猿を打つて見よ打殺しても宜い打てと云ふ指圖ださうであるが打つことが出来ぬ、大きい猿でないが己れの身に相當した竹刀が出来て居る。他の劍術の道場では目錄を受けた免許になつ

たと云ふ經驗を得た積りて行く者も時々猿に打たれる。畜生目の眩む程撲つてやりたいと思ふが猿は小さな身で飛ぶさうであるから此方の竹刀へ飛上つてきて打つことが出来ぬ、然るに或時海舟さんが其先生のお供をして王子へ往かれたさうである。其れも名を忘れましたが、禪宗の坊さん——禪宗では住菴と云ふが王子の村落に小さな菴室が有る、そこに住庵して居る坊さんの所へ劍術の先生が參禪に行かれたので、其お供をさせられた海舟翁はまだ年の往かぬ子供上りの時であつたから次の間に先生が坊さんから話を承つて居るのを傍聴して居た。其時に機を忘ずると云ふ話を聽かれたさうである。忘機と言はれたかどうか知らぬが話は全くそれである。自分の心の中に一物有つて斯うしやうとか、あししやうとか目論見があつては決して成功することはない出来ぬ、これは劍術の上に於て最も病である。劍は人を斬るものでは



ない他に斬られざるのが劍術である、即ち撃つものでない衛るものである、然るに此方から打たう／＼今度は斯うして打たうあゝして打たうと思ふ、決して打つことの出来るものではないと云ふ話をするのを聽いて海舟翁はあゝ茲だたと悟つた、勝海舟先生豁然として省あり——直に悟つたのでないが一寸氣が附いた、此方が打たうと思ふのが抑々誤りである、此一點に於て修養したならば終に猿を打つことにならうかと思つた、まだ實は機は忘ぜられない、けれどもそこに氣が付いたから、是までは猿に向へば直に此方から打つて掛つたが今度は此方から打つて掛らぬ、竹刀を以つてあしらつて居ると此方に隙が有る、そこで向ふから打つて來た、其時始めて其猿を打てたさうで、其時の嬉しさは堪らなかつたと云ふことである、最初は此方に隙が無い、覘つて行く、却て彼がために嘲弄せられて、此方が隙を見せた、即ち機を忘るるに近

付いて先方から覘つて來た、其時は先方に機が起つて來たので、其時初めて打つことが出來たと云ふ話をせられた事が有つた、さう云ふやうな具合で吾々はあゝんよは上手から、飯を食ふことから、字を書くにしても、劍術を使ふにしても、總ての事が機を忘るるに至らんければ本當のものでない、倫理——君臣父子夫婦兄弟朋友とか社會の交際の上に付ても然うであらう、君に忠義を盡す、親に孝行をする、乃至君は臣民を憐む、親が子を慈む、夫婦愛する、朋友相信ずると云ふ場合にも、茲に一の機があつて斯うしなければならぬ、あゝもせねばなるまい、と此方の胸の機關きかんがあり、貯へた一物有つてやつて行くことは本當のものでない、吾々は忠義をしなければならぬ、義務がある、是は權利である、權利であるから斯うする、義務だから斯うしなければならぬとか、そんな名が付いて居る間は決して靈妙名狀すべからざる所の一致したものでない、靈妙



名狀すべからざる一致に到つた時には、モ、其跡形は無い、權利も無いれば義務も無い、太陽が日に吾々を照す、權利か義務か、權利でも無い義務でも無い善であるか悪であるか、善でも無い悪でも無い、たゞ彼は彼の本分を盡すのである、水は物を濕す、權利か義務か、火は物を焼く、善か悪か、善悪も是非も曲直も無い、宇宙萬物機を忘れて其本分が自然と現はれて初て靈妙名狀すべからざる一致を見ること出来る、夫婦もさうであつて可愛がらねばならぬはずであるから可愛がる、夫を愛さねばならぬ譯であるから愛する、そんな理屈のある間は眞の夫婦の情は起らぬ、兄弟にしても朋友にしても其通り、總ての事が道理を離れ理屈を離れ無意識に委せ行くに至つて初て靈妙名狀すべからざる處に到ることが出来るのである、是はなか／＼むづかしい事であるけれども其むづかしき處をどうかして吾々は得なければならぬ、それを得るに

はどうするか、其得る方法をむづかしく言へば限りもないが、之を簡単に、平易に、單純に、極めて心やすく得やうとする方法を立つたのが即ち宗教である、其宗教に依らずして之を得やうと云ふことは容易の事でない、其一例を言へば孔子——孔子といふ人はどれ程の悟を開いた人であるかと云ふと孔子自ら自分の履歷を言ふて居る、十有五而志學、乃至七十而從心所欲不踰矩、是が孔子の悟である、心所欲といふは思ふ儘にするのである、泣かうと思へば泣き、叱らうと思へば叱り、褒めやうと思へば褒め、心の儘にしてそれが悉く矩を踰えず、ちやんと道理に適ふ適はせやうと云ふのでない自然に道理に合つて往くのである、之を中庸には、不勉而中、不思而得と云ふてある、吾々も互はどうであらうぞ、其うしては濟ひまい斯うしなければなるまいと注意に注意を加へても兎角道に反き勝ちである、流石は孔子である、思ふ儘にするのが皆其儘



悉く矩に適ふたと云ふはえらい事である、それは何時であるか七十の後のことである、それより前はどうか其前は、十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩の處へは行かれなかつたと見える、其證據は論語の上から見ても澤山有る、隨分あの人は剛情のことも言ふた人である、孔子が陳と蔡との間に於て間違へられるに程のあつたものであるが、陽虎といふ泥坊のやうな悪人と間違へられ捕縛せられて監獄へ抛り込まれ、三日絶糧とある、今日はどのやうな強盗でも殺人犯でも警察へ留置になつても飯を食はせずには置かぬが、三千年前の支那監獄は飯を食はせなかつたと見える、腹が空いて堪らぬ、従ふて居る弟子の中の子路、此人は御承知の如く氣の強い理屈っぽい男である、子路慍見曰とあるから十

分怒氣を含んで孔子に向つた、君子亦有窮乎——吾々如き先王の道を履んで聖人の教を守つて行く君子たる者が此の如く難儀をすると云ふことがござるか、一體天道様も残酷な吾々の如き君子を斯様に虐待すると云ふことは無さうなものであると、子路は恐しく氣を逞しくして質問した、其時孔子の答がどうである、君子固窮、機を忘れて居れば洒々落々其方も腹が空いたか仕方が無い我慢しろて宜い、君子固窮など、言はんで宜い、そんな理屈は言ふに及ばぬ、君子は窮するに極つたものではない、君子も或場合には富みたとして差支なからう、君子は窮さなければならぬはずのものではない、これは君子といふことを擔いて居る、そんな物を擔いては重からう、君子は窮するのが當り前である、そんな理屈を脊負つて居る、厄介な物を脊負つて居る、機を忘ずる譯に往かぬからである、さう云ふ事は孔子に幾らも有る、子見南子、南子とは衛の



靈公の夫人て其頃評判の悪い女であるから君子たるべき者が逢ふべきものでない、孔子は其南子に逢はふと云ふ、其時子路があんな者にお逢なされてはいけませぬと異見をした、其時予所否者天厭之と云ふやうな理屈を言ふて居る、又子欲居于九夷支那に居ても道は行はれぬ、イツソ外國へ行かうかと云ふ、其様な選り嫌ひするのも、機が忘じられぬいからである、機さへ忘ずればどのやうな處に居ても絶対の眞理と一致して靈妙名狀すべからざる所の喜びを受けられるはずである、其れを選り嫌ひすると云ふは、まだ「從心所欲不踰矩」と云ふ所まで行かなかつた證據である、然るに更に修養が積んで七十になられてからは所謂機を忘れて靈妙名狀すべからざる所の有様が現はれて來たのである、けれども其後二三年にして逝去になつたのである、孔子がどんなやうな有様であつたやら論語の上に於ても其他の書籍に於ても「從心所

欲不踰矩」後の事は見る事が出來ない、けれどもそれまでは確に行かれたものであらうと信ずるのである、聖人にして既に然うであるから中々吾々が一と通りの修養によつて機を忘ずるに到るといふことは容易の事でない、西洋の學者から承はる所によれば、ソクラテスの弟子も多うかつた中にダイオゼテスと云ふ大層な大哲學者があつた、また其同學にプラトールと云ふ人が有つた、此人も名高い大哲學者である、けれども其境遇が異つて居る、學說を別としてプラトールは富貴の人である、生活に困らぬ人である、一種の見識を具へて居る、學友ではあるがダイオゼテスは極めて貧乏な人である、のみならず富貴といふことは大嫌ひの男である、殊に貧乏を喜ぶと云ふ質の人である、茲に於て二人は全く反對である、けれどもプラトールは其富貴といふことを鼻にかけて威張つて居たか居なかつたか明かでないが、ダイオゼテスは貧乏を鼻



にかけて居たに違ひない、それが即ち機を忘ぜられない證據である、苟も大哲學者たる者が名利などを喜ぶべき者でないと言ふ見識は一往尤もなことである、近頃では名譽とか利益とか云ふことを大層大切に言ふ、一往大切のものには違ひないけれども、孟子は常に言ふた、人間と動物との差別はどこにあるか利と義の間にある、たゞ利益を求めるものであつたならば人間と動物と差別が無い、利益を捨て、名譽を取る、茲に於て人間と動物との差別が付くのであるから、孟子は始終吾々に名を揚げなければならぬと云つて、孝經の名を揚げ父母を顯はすが孝行の結局であると言ふ意味を勧められる、利ばかり求めることは勿論卑しいけれども若し之を佛教の立場から見れば其の名を求めると云ふこともヤハリ諱らぬことになる、故に名利共に捨て、何事も因縁に任せきることが本統に出來て始めて始めて宗教に安住したといふ者である、

ダオオゼチヌの如きは既に利を捨てたのであるから、孔子が御覽になつても孟子が見られても立派な人間の最上の位に立つた人であらう、即ち利を捨てると云ふことから富貴を重んじないばかりでなく富貴を喜ぶことを輕蔑する考が起つたのは無理が無い、そこでプラト一の富貴の鼻を踏み蹂らうとプラト一の立派な座敷、光り輝くやうな粧飾のある室内の敷物を泥靴の儘で踏み散したと云ふ話がある、是はどうした事であらうぞ、プラト一が富貴を以て威張つて居たかどうかは知らぬが、それは別としてそれが忌々しい、あんな立派な生活を廢して吾と一所に乞食のやうにならぬが諱らぬと云つて、此の如き事をするは謂ゆる機を忘ずると云ふ境界までには餘程遠い話である、誠に陋劣なる機が烈しいと云はなければならぬ、哲學者といふことが鼻にかゝるのである、プラト一が富貴を高慢に思つて居たかどうか知らんが、ダイ



オゼチスが貧乏を高慢にして居ることも威服が出来ない、そして富貴なる人の所へ行つて立派な敷物を汚して愉快だと云ふ下品千萬の心事が淺ましい根性である、アレキサンドルはアリストートルの教を受けたと云ひ、アリストートルはプラトリーの弟子であるから、ダイオゼチスとアレキサンドルとは伯父さんと甥のやうな関係の同時代の人であつた、或時ダイオゼチスの居る處——ダイオゼチスは大きな酒樽のやうな物の中へ入つて、寒い朝は日向へそれを持出して脊中あぶりをして居た、其處へ歴山大王御臨幸、供奉の大勢の人が立つたから日が影になつて、寒くて仕方がない、折角のストーブの火が消えたやうな具合、歴山大王は汝何を望みがあるなら、我は此國の國王であるから、如何なる望でも叶へて進ぜやうと云ふ、ダイオゼチスは外に望はござらぬが、其處を退いて下され日が當らぬので困ると言ふた、是は餘程機を忘じ

た氣味がある、前の泥足で行つてプラトリーの高慢の鼻を踏み踏つてやると言つた時よりは餘程機が衰へて居るやうに思はれるけれども、未だ——眞の無我無念の境には甚だ遠い、斯う云ふことを研究して歴史上に涉つて見ると、色々面白い話があつて吾々に修養の參考を與へて呉れる、禪宗の方では名高い話であるが支那の徳宗皇帝の時に懶燦禪師と云ふのが有つた、此人非常に高德の令名があつたから、徳宗皇帝其の懶燦禪師を宮中へ請待して法を聴きたいと云ふので、勅使を立てた、勅使が禪師の許へ行つて見ると、槽木を焚いて何か火の中から掘出して吹きながら食つて居る、見ると藪を焼いて吹いて食つて居るのである、支那の尊大なる天子而も唐朝時代の天子の勅使が來たのである、然るに勅使が來ても構はない頻りに藪を食つて居る、何を言ふても返辭も見向もしない、其上鼻汁をたらし居る、勅使も見兼ねたか、餘計な世



話だが和尚とにかく鼻汁を拭いてはどうだと言つた、なかなか天子の勅を逃べるまでに往かぬ、其時和尚初て口を利いた、豈に俗人の爲に工夫して鼻涕を拭ふの閑あらんや、其方等の爲に鼻汁を拭いて居る暇は無いと云ふた、茲に於て一つ考へて見なければならぬ、禪宗に於ては通常之をえらい事のやうに言ふて居るが、もう一際ではあるまいか、諸を食ふも宜いが、他が鼻汁を拭けと言へば拭いても宜い、若し其鼻汁を拭へと言ふたのが子供であつたらどうであらう、おぢさんはなを拭きなさい、よと言はれたら、懶燦和尚は理屈は言はなかつたであらうと思ふ、天子の使者だと云ふことが癩に障つて居る、何かえらい者の使者が來てそれに物を言はれたのが癩に障はる、一體天子が來いと云ふのが餘計な世話だ、法を聽きたければ來るが宜い、其見識はえらいが其靈妙名狀すべからざる一致の境涯の處に到ることは未だしてある。

斯う云ふと機を忘ずるといふことが大層むつかしいことになつて來るが、しかし、普通常識のある母親は自分の子を育て、居る間の機を忘じて居る、其母親が子供に乳房を哺ませる、其子が泣く笑ふ、大小便の世話をする、其間は何の機も無い、此子は己の子だから世話せねばならぬ、義務がある、親の権利だから斯くせねばならぬ、其様な理屈はない、親めかす譯も無い、此恩を忘れてはいかぬぞ、生涯の間母親を大切に孝行せねばならぬぞ、其様な理屈は無い、其様な理屈を以つて行つたならば、母と子とが一致して靈妙名狀すべからざる境涯には行かぬのである、むつかしく言へば大層むつかしく聞えるが、直に手許に於て靈妙名狀すべからざる一致を或部分に於て見て居る、此一致を今宇宙の眞理と我との間に見るのである、眞理と我との間が此名狀すべからざる所まで到つたならば、人間となつた能事了るのである、そして親子兄弟夫婦の



上に社會の上に國家の上に應用し得らるゝに至つて初て何事を爲すにも少しも難儀もなく、如何なる善事をしても鼻にかける譯もない、天地自然の姿が吾々人間の上に現はれて來る、宗教の効果は是非共こゝまで行かなければならぬ、それまで行く間には稽古を要する、前に言ふた如く手習をするにも筆の取樣墨の付樣が一致して終に手本離れをするに到るのでありますから、それと同様に結局機を忘れて宇宙萬象有りの儘の姿に吾々朝夕の姿が行きたいと思ふ、願はくは此點に向つて修養して行きたいものであると考へるのである、

### 八、入位と信決定

曹洞宗では、授戒の一法を以て在家を化導するとなりて居りますが、どうして在家の老若男女が彼の他力易行の淨土門と同様に、必らず成

佛得道することが出来るて有らうぞと云ふのが一大問題である、此の問題に答へるには根本的に佛教の目的を研究して見ねばならぬが、簡短に言ふて見れば、佛教の目的は成佛する即ち佛に成ると云ふだけのことである、語をかへて言へば三世諸佛の仲間入りをするると云ふことである、然るに此の凡夫が彼の佛の仲間入りをするると云ふに就ては、段々階級があつて追々に其の位が進んで往くのが當然のこと、現に學問をして學士とか博士とか云ふ學位を得るにも、又は官員になつて勅任とか親任とか云ふ官位に至るにも、皆それ／＼の順序のあるのは當り前のことである、然るに其の學問の順序にも一旦普通學を卒業して置けば、最早や再び全くの無學文盲に戻るといふことは無いやうなもので、不退すなはち決して後戻りをしないと云ふ所の位まで入ると云ふのが肝要である、其れを今は入位といふのである、理想の上から申



せば此れが、直に佛の位に入たのであるけれども、事實の上に於ては再び元の凡夫に戻らないと云ふ所に落ち着きが附いたのである、ソコで如何ほど高尚なる理想を説く宗旨でも、實際の所は只此の一生の間に於て必ず此の不退の位に入るとが出来れば、先づ佛法修行の目的は定まつたものとするのである、其一例を申せば、天台宗は三觀十乘の教相その學問修行なか／＼尋常容易などでは無いけれども、要する所は一生に初住の位に入るといふのが目的である、初住といふは謂ゆる五十二位の階級に於て十信十住十行十回向十地それから等覺妙覺とある中の十住の第一位を初住といふのである、此の位は前の十信に於て初信から二信三信と進んで遂に第十信に至つたのが即ち信の位の決定成満したので、信満といふたり又は信決定といふたりするのである、ソコで信の位が満つれば其の次は初めて住の位すなはち初住の位に

入るのであるから、譬へば尋常科を卒業した時が直に高等科に入るの資格が出来た時であるやうなもので、已に此住の位に入りさへすれば、謂ゆる住不退轉で決して再び後戻りして惡趣に墮落する氣遣ひがないのである、然るに其住の位に入るのは即ち前の信の位の決定成満した時であるのだが、宗旨の立て方に依ては之を後の住の位に入るとは言はず信の位が決定したといふ方ばかり言ふて居るのもある、即ち眞宗の如きは専はら信心決定とばかり勸めて、其信心決定さへすれば必ず入正定聚住不退轉の位であるから、彌勒菩薩と同躰て一生補處の菩薩と同じ身分であるぞと教へて居る、都べて眞宗の勸めかたは非常に高尚なる法門を至つて卑近に取り扱かつて、如何なる愚痴無智の凡夫にも入り易く信じ易いやうに教へるのであるから、同じ位のことでも成るたけ低い方で言つて、住とは言はずに信と言ふたものである



其の信も初信では致し方が無いから、信心決定といふことを嚴重に云ふのである、其の信心とは如何なる程度の信心かと云ふに、正信偈の中に、彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に即時に必定に入る」と言ふてある、即ち圓滿報身の本願を憶念して一點の疑も無くなつたのが真宗の信心決定である語を換へて申せば佛の心と我が心と一致して疑ひの無いのが入正定聚住不退轉の時である、是れは決して真宗に限つたことでは無い、曹洞宗に於ても全たく其の通りのこととて、承陽大師は正法眼藏の中に、正信の助くるところ惑ひを離るゝの道あり」と仰せられ、其の信ずる姿を説明せられては、我が身よからん我心何とあらんと思ふ心をすて、好くもあれ悪くもあれ佛祖の言語行履に隨がひゆくなり」と仰せられた所などでは、彼の他力易行を主とする浄土門と何の差別もないことになる、然のみならず、佛果位に非ざれば信現成せず信現成す

る所すなはち佛果位なり」と仰せられた所に於ては、謂ゆる信滿成佛といふので、只その信心決定の當處たゞちに是れ成佛果滿と同じ位なることを明示せられたのである、果して然らば天台宗に於ても信心決定を一生入位の目的とし、真宗に於ても信心決定を以て入正定聚と定め、別して曹洞宗に於ては信現成の所を佛果位と定められてある、即ち聖道浄土教家禪のいつれも皆信心決定を以て佛法修行の目的としてあることが誠に明らかである、但その信心を決定する對象が天台には天台の定めがあり、真宗には真宗の定めがある、其の中に尤も普遍的に智愚賢不肖に拘はらず誰も彼も普ねく信心を得やすいのは真宗である、論より證據に真宗門徒の老若男女が彌陀の本願が五劫の思惟に始まり兆載永劫の修行を経て、已に十劫の昔に成就してあることを聞き得て一點の疑ひなく、助けたまへと頼む一念發起した當處、この身この儘に入正